

第七部 白と黒の継ぎ手

 フウルウが二つの屍に顔をしかめていると、ラシードが予想通りの詰問をする。

「しかし、その外套と藜杖は……！」

「その《アルリアリア・ムラート・アブヤド白衣の賢者》アルリックシル殿にお借りしています」

「……それを信じると？」

「私も難しいと思っています。そこで提案です。文字は読めますね？」

そう言つて、フウルウは《サラーフ・アルリムイード再生への導き手》には見えない角度で、ラシードに紙切れを見せた。

「……確かに賢者様の文字だな。だが、これを賢者様が脅されて無理やり書かされたのではないという保障は？」

こちらの顔色を観察するためだろう。彼はぎろりと睨んで来た。

フウルウはいい判断だなと思う。「ありません。ただ、それを確認するためにも……」

「わかった。この指示に従おう」
 「感謝します」

選択肢がそう多くないだけなのだとわかっていても、フウルウはそう言いたい気分だった。そして、鶴とラシードを庇う様な形でフウルウは前に出る。

「死になさい」

その巫女の一言で、巫女を除く《サラーフ・アルリムイード再生への導き手》が射刀を放ち、あるいは巫術を放った。

その目標はフウルウ一人。

勿論、フウルウは既に《虎体狼腰》を発現済みだ。視覚系擬似時間加速能力《神魔の瞳》模倣版でそれらの攻撃をまとめて認識する。その全てがフウルウに集中しているのが、逆に好都合だった。強化された身体能力で、その射刀を藜杖で叩き落とし、その巫術を白衣で薙ぎ払い、あるいはその両方を躲しきった。

まさに疾風。

視覚系擬似時間加速が解除された頃には、無力化された精霊の残滓が大気に満ち、叩き折られた射刀が大地に散らばっていた。

ラシードたちは自分の目が信じられないかのような顔をし、さすがの巫女もこれには感嘆の声が上げた。

もつとも、フウルウは冷や汗ものである。

フウルウは自分に向けられた敵意の総てを防ぎ、全てを躲した。

その必要があったのだ。つまり、彼女たちの攻撃は一発たりとも外れていないのである。あれだけの数の集中砲火であるにもかかわらず、その射線は例外なくフウルウの身体を貫こうとしていた。しかも、彼女たちは未だ半円状の包囲を微塵も崩す気配は無い。完璧に操典を再現している。練度の高さは明白だった。

——ウカハゲキ 僞巫跛靨の類ではない。

既にフウルウは気付いていた。

ミナレットの村で出会ったあの三人の男たちは見当たらない。

そもそも、男自体が混ざっていない。というか、混ざらせてもらえないのだろう。上古を固持する《再生への導き手》には、女尊男卑の傾向がある。神々に仕える清き処女に対しては、影を踏むことすら、穢れた男には許されない。とはいえ、人員補充の問題から、それを実際に遵守できるのは、一握りの部隊だけと考えられる。

そして、彼女たちはその選り抜かれた精鋭なのだ。

実際、巫女の部下たち——おそらく媵婢ようひ（端女はしため）——は、皆二十歳前後の整った顔立ちの娘たちだった。しかし、巫女と違い、こざっぱりした服に引き締まった顔の集団である。おまけに物理的な体格や挙動までディーナザードに近い——つまり、その俊敏と柔軟と秀でた体術を証明している。また、手持ちの武器も槍や矛ではなく、短刀や射刀の如き暗器が中心。おそらく、この《アトラハシスの巫女》を補助支援するため、隠密諜報及び能動防御に特化した股肱なのだ。

——《再生への導き手》の最精鋭、古の虎賁こほんとは彼女たちのことか。

フウルウはラシードと異なり、《アトラハシスの巫女》の力を十分に観察していたわけではない。しかし、こういう集団を顎で使える辺り、その脅威の程が窺い知れる。

そして、その巫女の方でもフウルウを語るに足る相手と認めたらしい。彼女は細長い金器を取り出した。間違いなく、精霊結晶——それも今時、剣である。刀ではなく剣——すなわち、神剣をとりだしたということは、巫女が本気になったと見てもよい。

それを認めてから、フウルウは問いかける。「さて、どうする？ 《再生への導き手》」

「どうする……とは？」

「おいおい、まさか、わかっていないというわけではあるまい？ 時間が経てば経つほど君たちは不利になる。君たちがここにいるということが把握された時点で、戦略的には敗北しているのだ」

「そうですか？ 皆殺しにすれば済むことです」

「それが戦略的な敗北だというのだよ。いきなり、これだけの数の人間が消失すれば、それだけで市民生活に影響が出る。帝国の目に留まるぞ。本当はわかっているんだろう？ 帝国がその気になれば自分たちなど一瞬でこの地上から抹消されるということぐらい」

「我々は厳然と存在しています」

「それは対費用効率の問題に過ぎん。君らが存在することによる損失と、君らを抹消することによる損失を秤にかけた結果、前者を選んでいるのだ。しかし、後者を前者が上回れば、後者が選択されるだろう。帝国に限った話ではない。社会とはそういうものさ」

見事な弁舌だった。完全なる沈黙——そしてその裏付けになる絶対の自信——に満ちていた《再生への導き手》にも見えない動揺が走り出す。

「そもそも、こちらを皆殺しに出来ると本気で思っているのか？」

「ここに既に二つもの屍が存在しますが？」

「二つしか屍が存在しないのだ。先制攻撃という一方的な奇襲——その圧倒的に有利な条件ですら、君たちは屍を二つしか生み出せなかった。ところが、もう奇襲は成立しない。既に皆が君たちの戦力と戦術の分析を始め、それに対する策を組み立てている。それ以上

に、そして、それ以前に、君たちが敵だという認識が厳然と確立されたのだよ。こちらは量的にも援軍が期待できる。今後、君たちの状況は悪化することはあっても好転することはない」

いつの間にか、ラシードたち《サイフナルリイグシヒ霊薬の刃》の表情にも余裕が生まれてきていた。フウルウの弁舌に健全な自信を取り戻しつつあるのだ。それにピヤオ・フウルウという正体不明だが、あの《アトラハシスの巫女》にも拮抗しうる超人が味方になりつつあるのだ。しかも、鶴とは違い、精神的な安定も期待できる。

士気が逆転し始めていた。

しかも、フウルウと情報連結している鶴には

——『始まりは、妖婦にして、神女の誘い。新淫の声、北鄙の舞』

という空気の振るえを伴わない祝詞が聞こえている。

オトナシノマナガッラ無発声式言語巫術だ。

精霊は別に発声器官に反応しているのではない。主に大脳皮質の活動に反応しているのである。だからこそ、観念巫術は成立する。同様に側頭葉を中心にした言語野の活動さえ、存在していれば、言語巫術も発現しうるのだ。勿論、発声を伴わずに、明確な言語野の運動を引き起こすのは難しく、天性の器用さか、根気強い修練のいずれかを必要とするのだ——まさか、あの弁舌と並列して、祝詞を唱えているとは……。

しかも、このフウルウの祝詞は……！

——『其は辛なる日輪。受にして、紂。金油を用いて、上空に向かい、燎煙を以って、祖霊を饗す。嗚呼、祭礼を彩るは靡靡の楽。天に届くは人柱の芳香！』

ここで《アトラハシスの巫女》は気付いたらしい。露骨に顔色が変わった。

「その紙を見せなさい……！」

「勿論、そのつもりだよ」

そう言って、フウルウはその紙を《アトラハシスの巫女》の方へ向ける。

「さあ、よく見るがいい」

思わず、鶴は息を止め眼を瞑った。彼の手にしていた紙切れが炎に包まれる。

刹那の後、フウルウは言霊を結ぶ。

『《パオラオシーファ炮烙之法》』

そして、爆轟と裂光が森に満ち満ちた。

ろくな準備もないのに、フウルウごときが本物の《パオラオシーファ炮烙之法》》を使えるはずもない。

あれは威力を犠牲にした紛いモノだった。その代わり、音と光の派手さは本物並みで——要するにフウルウは攪乱のためだけにあの巫術を使ったのだった。

そのことに気付いた時、鶴は例によって、フウルウに首根っこを掴まれて、傀儡の脚で山林を移動中——というか、逃走中だった（ラシードたちも同じように離脱したらしい）。「……もうこれが何度目だったか、尋ねる気にもなれませんか」

「あのまま闘っても勝算は高くない。仮に勝っても失うものが多すぎる」

天の時も地の利も人の和もないのに、博打に走るのは愚行だとフウルウは断ずる。

「……それ、いつになったら、揃うんですか？」

「今日中には揃うよ。布石は打ってある。私は勝つべくして勝つ」

フウルウはアル||イクシルとは違う。五千人の男がいるなら、五千個の麵麩パンと五千匹の魚を渡す。そのために生産と流通の体制を予め整えておく。それができるのがピャオ・フウルウであり、それ故にアル||イクシルのような奇跡を必要としないのだ。

しかし、鶴にはその偉大さがまだわからないらしい。

「その割に、御実家の方で散々な目にあつたようですけど？」

「参つたな。デイナーザードが口を滑らしたのか？」フウルウは渋い顔になつたのを自覚した。「しかし、だからこそ、その反省を活かしているんだ。私は君とは違う」

「どういう意味です？ アル||イクシルには勝てないから諦めるとでも？」

「ああ、それはもうやめよう。鶴、勝ち負けの問題ではない。君は彼を殺すべきではない」
言ってから――さすがにこれは逆鱗に触れるか？――とフウルウは思った。

「……降ろして下さい」

「何？」

「降ろして下さいと言っているんです！ この速度で障害物の中を疾走なんて、首根っこを掴まれて、運ばれるわたしの恐怖も考えてください」

よく見ると鶴はぎゅっと目を閉じたままだった。

鶴の恐怖はもつともである。フウルウは手・近・な・川・沿・い・の・岩・場・に・着・く・と・す・ぐ・に・体・を・休・め・る・こ・と・に・し・た・。

それに今後の方策も説明せねばならない。そうフウルウは思ったのだが、案の定、鶴は先程の発言に絡んできた。

「どういうつもりですか？ アル||イクシルを見逃せなんて！ あの男はお師匠様を弑したんですよ！」

「……弑したって……」突っ込みたいことだらけであつたが、フウルウは細かいことは気にせず、「違うな。彼は無実だ」

下手をすると、アル||イクシル共々、鶴の復讐の対象にされかねない。そんな危険な一言であることは承知の上で、フウルウは真実を告げた。

「そんな筈はありません。だってお師匠様は確かに、死ぬ間際に『私はアル||イクシルに殺されたのよ』って……だから、私は！」

「それは女媧娘々の嘘だ」大分前からの推測をフウルウは口にした。

「お師匠様が嘘をつく筈がありません！」

その瞳が見誤り様のない瞋恚の焰に彩られたのをフウルウは再び見た。

しかし、彼はもう冷たい声で焰を薙ぎ払う必要はない。

「だって、だって……」

「嘘による利益は自らの信義を代償とし、信義を失うに値する利益などこの世にない……と、お師匠様が言っていたかい？」

鶴は大きく頷いた。

「そうだな。でも、君の師母は信義を失うに値する利益を見つけたんだよ」

「あなたがお師匠様の何を知っているっていうんですかっ！」

「何も知らないさ。何も知らない人を知りたいから、私は歴史を学んでいる。学問というのは、何も知らない者が何も知らないことを知ることだからね」

鶴は押し黙った。

「君の師匠が自分の信義よりも大切だったもの、それは君だ」

「……！」

「鶴、女媧娘々が死ぬことを悟った時、君は後を追って、自殺するつもりだったのか？」

「………っ！」

「それは女媧娘々が最も恐れていたことだった。確信があつたかどうかまではわからないがね。だから、君がアルⅡイクシルに会う様に仕向けたんだ。そうすれば、最悪でも、君はアルⅡイクシルに会うまでは生き長らえる」

随分、ややこしいことをしたものだと思う。アルⅡイクシルにとっては迷惑な話だし——不思議と、フウルウにとっては迷惑ではなかったが——他にも方法はあつた筈だ。しかし、鶴とアルⅡイクシルの証言と、資料から推察される女媧娘々の性格を考えれば、この仮説はそれ程、不自然ではない。

そして、肝心要のアルⅡイクシルは認めないだろうが、

「君がアルⅡイクシルと会えば、彼は君を幸せにしようとする。自分よりも先に死なせる様なことは絶対にしない。女媧娘々のアルⅡイクシルに対する評価は微妙だし、私にはその理由がわからない。しかし、その確信は彼女にもきつとあつた。まあ、自分の仇に仕立てあげたのは、彼の言う通り、嫌がらせかもしれない。だが、いずれにせよ、女媧娘々は君のことを誰よりも深く知っていて、何よりも強く想っていたんだ」

次の一言は辛い一言だった。言いたくない一言だった。

だが、言わなくてはならない。

言わねばならぬことを言わずに済ませることは大人には許されない。

「鶴、ここで、アルⅡイクシルと暮らしてみる気はないか？」

「……正気ですか？」

「女媧娘々は自分を一番嫌う人間の下へ君を行かせた。それは彼に君を育て上げて欲しかったからじゃないか？ アルⅡイクシルこそ、君の父親に相応しいと考えていたんじゃないか？ 何より君は女媧娘々と距離を置く必要がある」

最後の一言は予想通り、少女の逆鱗に触れた様だ。

「あなたがわたしの何を知っているっていうんですか？」

「君がそういう女の子だってことだよ」

「わたし、たった今、フウルウさんのことがあの男の次に嫌いになりました」鶴はぷいとそっぽを向いた。「大体、あなたはわたし無しでは生きられないんですよ。わかっています、そんなことを言うなんて、見損ないました」

「……ああ、そういえば、そうだったな」

買い被つてくれているのを、わざわざ、興醒めさせることもない。だから、あえて答えなかったが、実は忘れていた。よく考えてみれば、見ず知らずの男に鶴を預け、一人でミナレットに返ったら、ディーナザードに八つ裂きにされるだろう。

「でも……フウルウさん、告白します。わたし、薄々わかってました。少なくとも、お師匠様がアル||イクシルを恨んでいないことと、わたしに仇討ちを望んでいないことを」
 鶴はまたその双眸に涙を浮かべた。しかし、その涙は今までのそれと異なり、笑みを伴った美しい涙であった。

「だって、お師匠様は……ずっと笑ってたから……」

しかし、鶴は仇討ちを望んだ。認めたくない気持ちで一杯であり、他にすることがなかったから。

「わたし、お師匠様の手を握りました。最期に『お母さん』って呼びました。それで、十分だって、お師匠様は言ってくれました」

フウルウの内奥に過去の己とアル||イクシルの言葉が甦った。

今、泣いているこの少女は、自分にできなかったことを既にやり遂げているのだ。

「でも、そんなものは無意味です。無価値です。わたしには無意味なんです。無価値なんです。わたしが欲しかったのはそんな言葉なんかじゃなくて——生きているお師匠様だった」

「……」

「わたしはアル||イクシルが憎くて憎くてたまりませんでした。あいつの《杖》^{カムヌ}の力があれば、あの光り輝く十二枚の翼があれば、お師匠様を救うことができたかもしれない。絶対の不可逆現象たる『死』をも超越する真の《不死の靈薬》^{アル||イクシル}を顕現させえたかもしれないのに……」

「……医療みたいな複雑系への応用は難しいそうだ」

それはフウルウも考慮していたので、既に尋ねていた。もつとも、その時脳裏にあったのは、ある老いた男の姿だったが……。

「精霊密度の問題だけではない。例によってヒトの『精神』の複雑さが足を引つ張る。《杖》^{カムヌ}の力で、神経系をトップダウンで複製再生しようとすると量子もつれのクローン禁止定理にひっかかるんだとき。むしろ、ボトムアップで自己組織化してくれる無支祈システムや女媧泥ユニットの方が期待できるそうだ。……だからこそ、君の師母はその《夔》^{カムヌ}を作り上げた」

鶴は涙を拭きながら「でしょうね」と呟いた。

「仇討ちなんて、嘘です。わたしが殺したかったから、殺そうとしたんです——すべて、わたしのわがままなんです」

この少女は辛かったのだ。ただひたすらに。だから……。

「でも、君は『お母さん』って、言っただけであげられたんだらう？」

「え？」

「それができれば、君はもう大人だよ。少なくとも私よりずっとね」

「そんな！ わたしは口にお師匠様の名を唱えながら、ずっとお師匠様の心に叛いていた。わたしは……」

——愛というものは実に偉大だな。

それを実感したフウルウは鶴が泣き止むまで、黙って頭を撫でていた。

「さて、鶴、頼みがある」

「……何ですか、いまさら？」みつともない姿を見せてしまった後だからか、鶴の口調はきついものになっていた。「とういか、わたしによる調整なしで、よくもまあ、そこまで動けるものです」

「私とて巫術の覚えはある。傀儡自体に自律的な調整機能があるし、君からも簡単な指導は受けている」

「すぐに無理が祟りますよ」

「ああ、実はもうそんな気がしている」

「え？」

「……さつきちよつと無理したせいか足が痛い」

鶴は素早くフウルウの体内を走査した。

「……っ！ 右の靱帯が何本か切れています。完全に真つ二つです。あと、骨も数箇所碎けていますし、筋繊維の損耗も……」

「いやあ、やっぱり、そうか、そうか、それで痛いわけだ」

「……今に、始まったことではないでしょう？」

「おや、ばれていたかね？」

「いいえ。ディーナザードさんの推測です。……あなたは頭でつかちな男だから気を付けろと仰っていました」

精神が肉体をしばしば凌駕すると注意された。身体の発する疲労や苦痛という危険信号を無視し、気迫のみで立ち上がるうとする癖があると忠告された。

「慣れない運動でも意地になったり、あるいは論文執筆で興に乗ったりすると、体力の限界を超えているのに無理をし、結果、いきなりボタンと倒れこむことが何度もあったそうですね。おかげでディーナザードさんがいつも尻拭いをする羽目に」

「そういう困った奴の相手は疲れるかい？」

「構いませんよ。わたしは慣れていきますから、そういう人のお相手は」

フウルウが怪訝な顔を見せたので鶴は言葉を補った。

「……たしかに運動はあまり嗜まれませんでしたが。元々病弱であったと仰っていましたし。だけど、論文や実験などの成すべき事を成す時、あるいは、興が乗られた時は、飲まず食わず眠らずで徹夜の連続でした。当然、か弱いお体には負担だったと思われませんが、それでも、心で立ち続けていらつしやいました」

「傍迷惑だね」フウルウは自分を棚に上げる。

「フウルウさんよりはずっとましですよ。過労で倒れる直前になると、わたしを呼んで『後始末、よろしく』と必ず一言言ってくださってから、ボタンという方でしたから」

「それは……」

「ええ。お師匠様です」

鶴は己の頬が赤く染まっていることを自覚した。

あの方は、辛くても、苦しくても、成すべきことを成す人だった。まさにその姿は『大人』と呼ぶに相応しいものであった。

そして、ようやく鶴は気付いた。

——ああ、この人はお師匠様と同じなのだ。

だからこそ、自分は彼を己のたった一人の傀儡としたのだ。

そして、その傀儡は膝をつき、左の掌に右の拳を打ち付ける。

「これより先は——このピヤオ・フウルウが、臣命を賭して、我が后を扞禦いたします！」
胸の熱いものを抑えているのだろう——傀儡の男は珍しく高らかに吼えた。

「……ありがとうございます。わたしのフウルウ」

また、涙がこぼれそうになる鶴であったが、損耗箇所^{サイフ・アルレイクシル}の修繕が先である。《雙》を取り出し、傀儡との有線接続の準備を進める。ところが、フウルウはその鶴の手を遮った。

「修繕作業を始めるなら、一つ提案がある」と、彼は奇妙なことを言い、「《靈葉の刃》^{サイフ・アルレイクシル}の方々も聞いてもらいたいので出てきて下さい。大丈夫です。彼女たちはこの周辺にはいませんよ」と付け足した。

岩陰から表れたのはラシードたち《靈葉の刃》^{サイフ・アルレイクシル}——ただし、二名欠員——であった。どうということかと、鶴が啞然としていたので、フウルウは説明する。

元々、ラシードたちに見せた紙には、アルレイクシルの署名とフウルウの指示が書いてあった。アルレイクシルの署名は、この妙な夏国人を信用する旨で、フウルウの指示は、巫術で攪乱するので、その隙に散開離脱、以後、『川沿いの岩場』で合流、そこで情報交換を行いたいという旨である。

かなり大雑把な指示であったが、あの状況では細部まで予見することも伝達することも不可能だった。だから、その部分はラシードの方が酌んでくれ、休息中のフウルウたちを発見してくれたというわけだ。もっとも、この周辺で『川沿いの岩場』の条件を満たしているのはここ一箇所だけではなく、ラシードたちは幾つかの候補を総当りで試す羽目になったという（ちなみにここは第三候補だったらしい）。

とはいえ、それもフウルウは織り込み済みであった。そういった無茶も地元のラシードたちならば可能なはずで、かつ、逆に地理に明るくない自分たちは下手に動くべきでないと判断し、すぐに休息に入ったのである。

「……すべては貴様の手の平の上か？」

「人が悪いとは言わせませんよ。そちらこそ、私たち二人の事情を知るため、立ち聞きしていたのでしょうか？」

フウルウが「おかげであんなに恥ずかしいところまで見られてしまった」と大袈裟に嘆くと、鶴が頬を染めていた。

「だが、やはり、事情はよくわからんな」ラシードは常識人らしい返答をする。「わかったのは、貴様……いや、貴殿の知性は賢者様に比肩し得るかもしれないということと……」

この発言は微妙にフウルウの心に引っかかった。純粋な才知（特に人文哲学系）ならば、自分はアルレイクシルを凌駕していると自負している。しかし……、

「……その黒衣の魔女は浮世離れた変な奴だが、師匠思いのいい娘子だということだ。同じ浮世離れた変な奴でも、あの《アトラハシスの巫女》とは違うということだ」

という続く発言が実に素晴らしいので、うんうんとフウルウは頷いた。そして、今度は

鶴に向かつて説く。

「鶴、とりあえず、君は糖分補給を、それと《夔》や神御衣を含めた手持ちの精霊を全て休眠相へ移行。夕方には仕掛けるから、それまでに少しでも回復させてくれ」

「夕方には仕掛ける？ ……目立つ儀式を行えない以上、周辺精霊からの大規模補給は行えません。夕方まででは大した回復は期待できませんよ。わたしの神経疲労は気力で補えますが、精霊結晶の方は……」

しかし、そんなやりとりにラシードは顔を変えて、口を挟んだ。

「待て、先程の弁舌の通り、援軍を頼み待つのが得策ではないのか？」

「はい。しかし、彼女らを放置すれば、犠牲が増えるのでは？」

「そんなことはわかっている！」

ラシードは激昂した。

大声を出すと悟られかねないので、すぐに自制したが、考えてみれば無理もない。フルウが確認を取ったところ、やはり、彼は二人もの部下を失ったらしい。

その瞬間、フルウはラシードたち《サイファルリイシル霊葉の刃》と認識を共有したといってもよい。

実を言えば、この時点でフルウと鶴とアル||イクシルの問題はほぼ解決している。余計なことには首を突っ込まずに大人しくしているという選択もありえた。ラシードたちに恩を売っておくのは悪くはないが、ここで《サラーフ・アル||ムイード再生への導き手》と戦うのは不必要な危険を冒す愚行かもしれない。そもそも、フルウは攻撃的な性格だが、その根は政治家である。脅威が迫った時には、対費用効率を考え、交渉や逃走をまず選択する。この一件でもこれまではその原則を遵守してきた。

しかし、これは許容できない。

畢竟フルウは治世の人間だ。人命が安くなる乱世の人間ではない。また、そういった世界を拒絶し、忌避し、放逐したいと望んでいる。その点ではフルウは鶴やアル||イクシルよりもラシードに近い。

だから、死者が確認された瞬間に、フルウの頭は切り替わった。

脳裏にあった無数の選択肢が『《サラーフ・アル||ムイード再生への導き手》の撃滅』へと収束したのである。

それも迅速かつ確実に、だ。《サラーフ・アル||ムイード再生への導き手》の主張やラシードの証言、現場の状況から考えて、《サラーフ・アル||ムイード再生への導き手》の中でも《アトラハシスの巫女》は、優先的積極的に排除せねばならない。任務の内容故かこの現世うっしよへの適応を一定成し遂げていたあの三人の男たちとは訳が違う。彼女たちは時間経過に比例して、人を殺める。彼女たちが援軍に抹殺されると仮定しても、ここで見逃すことは、それだけで次の犠牲者を許容することになる。

しかし、それは許容できない。

この選択が鶴及びラシードたちの生命を博打に賭けるのだとしても、やはり、許容できない。

この命題がフルウを支配するのだ。

決意はラシードに伝わったらしい。その質問と意義が、彼我戦力比の問題へと変化した。

「……貴殿は我々を過大評価しているようだが、正直なところ、私にはまるで勝てる気がしない。あの巫女の部下とですら、我々では勝ち目が薄かろう。白兵戦ならともかく、あちらには巫術があるのだ」

そこでフルウは古の説客の如く弁舌を振るう。

「≪アトラハシスの巫女≫以外は通常の言語巫術を主体としています。ならば、祝詞を使わせないようにすればいい。この鶴ほどの巫術師を相手にするつもりだったのなら、そのための戦術や装備は整えてあるでしょう。祝詞を用いない観念巫術なら、その出力は雀の涙だ。むしろ、白兵戦の勝負になる。物理的な体術でなら……」

「無論だ。言語巫術を妨害することに集中できるのなら、我々一人につき、一人の巫術師を押さえ込めると自負している。しかし、足止めにしかならんぞ。しかも、あちらには≪アトラハシスの巫女≫がいる」

あの巫女には対巫術師用の戦術や装備はほとんど役に立たないとラシードは明言した。これは理屈でもそうだし、実証もされてしまった。何しろ、言語巫術誕生以来、それに対する策は『祝詞を唱え終わる前に叩け』である。これは発声式だろうが、無発声式だろうが同じことだ。この点においては鶴も通常の巫術師と変わらず、ラシードたちの付け入る隙となっていた。ところが、あの巫女ときたら、ほとんど祝詞を唱えずに巫術を発現させるのだ。これでは手も足も出ない。

それはわかる。しかし、

「問題ありません。あの腰婢十二名、それにアトラハシスの巫女が一柱」と、フウルウは傀儡の認識力で捕らえた戦力を示す。「そちらで、足止めさえしていただければ、私とこの娘の二人で、無力化できます」

「ふ、フウルウさん？」と、鶴はそこで声を挙げた。「繰り返しますが、夕暮れまではろくに回復は期待できませんよ」

それなのにどうして、『フウルウと鶴』という組み合わせが出てくるのだ。一歩譲って、フウルウが鍵となる戦力であるというのはわかる。

傀儡の超人的な身体能力は(既にボロボロであることを無視すれば)なるほど頼もしい。

だが、鶴は違う。

もう≪緩慢なる皆既食≫だけではない。その前提となる≪神降ろし≫も、それどころか、≪炮烙之法≫や≪十絶陣≫すらまともに発現させられない。夕暮れまで回復を待ったとしても、鶴の戦力は一般的な巫術師と同等か、それ以下の水準である。

しかし――。

「わかった」とラシードは頷く。

さすがにこれにはフウルウの方が驚いた。

「……よろしいのですか、そんなにあっさり受諾して。……いえ、そもそも、よく私の話にここまで付き合ってくれましたね」

実を言えば、戦術指揮を執るのは初めてではない。故郷での経験がある。しかし、それは官位や権威やらの裏づけの上でだ。ここでのフウルウはただの異邦人に過ぎない。それどころか、公務執行妨害で逮捕されてもおかしくない立場だ。

考えてみれば、ラシードがここまでフウルウの言葉に耳を傾けてくれるだけで、不自然である。怪訝に思っているとラシードは、

「その白衣にはそれだけの価値がある。おそらくは貴殿自身にも」

と語った。しかも、ラシードの部下たちも消極的ながら、賛同しているようだった。

「そうですか……」何故かその光景に今度はフウルウの瞳が熱くなった。「あれ……おかしいな。あの頃は万言を費やしてもわかってもらえなかったのに……」

心が通じていない。己のことしか考えていない。だから、人がついてこない。幾度も幾度も言われてきた呪詛の言葉。

いくら、アルⅡイクシルのお墨付きとはいえ、それがこうもあっさりと覆るとは……。」「ふ、フウルウさん？」

「どうやら、自分は泣いているらしい——と気付いたのは鶴の言葉だった。フウルウはすぐに「涙腺機能に異常は無いよ」と少女を落ち着かせる。

思えば、これが初めてではない。三十過ぎの男が人前で涙を見せるなどみつももないに程がある。少なくとも『虎狼の心あり』と揶揄されていた頃の自分には考えられない醜態だ。

しかも、今回はラシードたちという他人まで見ているというのに……。

そこで、フウルウは悟った。

——……俺は今、鶴を『他人』の範疇に入れていなかった。

いや、当然だ。考えてみれば、自分はもうこの少女に臣従を誓った身なのだ。

思わず、フウルウは瞑目する。……二言は無いぞ、既に鶴は他人ではないのだ。

これまでずっと自分に欠けていて、手に入れ難いと考えていた——『天の時』よりも『地の利』よりも、はるかに強い力——すなわち『人の和』を自分に齎したのは、このフウルウの小さな主君なのだ。

「……余計なお世話かもしれんがな。人の上に立つ者が軽々しく感情を表に出すべきではない。部下に動揺が走る」

ラシードの苦言にフウルウは「失礼」と指で己の涙を拭った。

「ですが、私は心理よりも論理を重んじた指導者でありたいと思っっているのです」

鶴はだけではない。出会って間もないラシードたちが従おうとしている。いや、そもそも、アルⅡイクシルもあまりにもあっさりとしてフウルウに白衣藜杖を託した。

それこそが己の才覚のみに頼ってきた男が、三十を過ぎてようやく身に付け始めてきた『徳』と呼ぶべきものなのかもしれない。しかし、そういった不明瞭な概念を毛嫌いしてこそそのフウルウである。

そんな頑固者にラシードは嘆息し、「では、その論理を示してもらおうか？」と質問した。

「その娘子の巫術師としての力は知っている。貴殿の超人的な力も目にした。だが娘子は力を使いきっているそうだし、貴殿の力は、昨日今日見たところ、お世辞にも安定しているとは言い難い」

だからこそ、あの絶妙の撤退をしたのだらうとラシードは言外に語る。なるほど、アルⅡイクシルの信頼を受けているだけのことはある。見事な洞察だ。

「達見です。しかし、ご安心を下さい」フウルウはかつての賢者の如く断言した。「このピャオ・フウルウに策があります」

それは完璧な布陣だった。

アルⅡイクシルとの合流は間に合わなかったが、鶴たちの搜索を諦め、とうとう一時帰

還を決めたらしい《再生への導き手》の待ち伏せに成功したのである。

囲まれていると気付いた時、あの巫女ですら、顔色を変えたぐらいだ。

驚いたのはフウルウも同じだ。正直、ラシードの土地勘がここまでとは思っていなかった。周囲に人家のない山道である。彼女たちを迎え撃つにこれ以上の場所はない。

——『人の和』は既に鶴が私に与えてくれている。さらに『地の利』はこのようにラシード殿が私に齎してくれた。その上『天の時』は……。

余裕がフウルウの顔に出てしまったらしい。既に神剣を抜き身に行っている巫女は「何がおかしいのですか？」と問いかける。

「いや、思った以上にうまくいったのでね。おかげで最終通告が出せる。——投降しろ、《アトラハシスの巫女》を除く十二名。諸君らの罪状は未だ殺人幫助及び殺人未遂のみだ。

幸いこちらには巫術師用の拘束用意も整っている。それなりの待遇は保障できる」

これには巫女の方が冷笑する。「稚拙ですね。我が股肱との絆が下らぬ離間で揺らぐとでも？」

実際、その十二名は巫女のような冷笑すらも垣間見せることはなかった。

フウルウは心底残念そうに溜め息をついた。

「そうか、では仕方が無い。皆殺しだ」

「これは大言……。ちなみに、あたくしには投降の勧告を行わないのですか？」

「私は狭量なる法家の徒として、故郷でも有名でね。二名もの殺人を見逃すわけにはいかない。貴様については処断あるのみだ」

「下らない」巫女はフウルウの言葉を嘲った。「たかだか、卑賤の民の一匹や二匹。……そもそも、あなたはこの国のものではないのでしょうか」

「だが、この国の水を飲んだものだ。いや、こう言い方はディーナザードに嫌われるな。

訂正しよう」フウルウはその手を鶴の頭の上に置く。「この娘は私の娘だ。手出しするものは排除する」

——言えた。言えたよ、ディーナザード。言えましたよ、父さん！

おそらく、頬を染めているであろう鶴が、小さく清冽で可憐な声で祝詞を唱える。それに合わせて、フウルウもまた己の魂を込めた言霊を紡ぐ。

「汝兄は、昼と夜を彷徨う旅人」

「我は、鶴鳥の声に伏せる傀儡」

「すべてを容れる色、すべてを拒む光、其は暝天なる漆黒」

「すべてを拒む色、すべてを容れる光、其は無垢なる純白」

巫女の指示を待たずにその言語巫術の完成を妨害しようとして動く《再生への導き手》。しかし、《霊薬の刃》はそれを完璧に阻む。そして、

「放てっ！」

ラシードの掛け声と共に《霊薬の刃》が一斉に弩から矢を放つ。機械式の発射装置から放たれる矢の威力と精度は、言うまでもなく、射刀とは比べ物にならない。殺傷力が高過ぎるので、使用を控えてきたが、今は『敵だという認識が厳然と確立』されているのだ。

躊躇いなく飛んでくる鎌の脅威に、巫女もその股肱もたじろぐものの、辛うじて物陰に身を隠し、あるいは手甲や巫術で、それを防ぐ。

その死傷者は——零。

ラシードの顔が恐怖に震えた。こういった機械的攻撃は対巫術師戦の基本であり、かつての神権政治打倒の原動力にもなったのだ。ところが、彼女たちにはまるで通用していない。だが、

「次、放て！」

再度の斉射を指示するラシード。先程と同じように矢は飛び、そして防がれる。そして、
「次、放て！」

三度、指示するラシード。その顔には余裕が浮かび、対する《再生への導き手》に焦燥が垣間見えた。やはり防がれる矢の雨であったが、しかし、《再生への導き手》もそれ以上のことが出来ないのだ。

これを繰り返せば、安全に足止めが出来る。

勿論、矢には限りがあるので、いずれ、ラシードたちは手詰まりとなる。

——逆に言えば、それまでは下手に攻めると《再生への導き手》が危うい。だから、動かない。動けない。損耗を覚悟で散開と突撃を選択されたら、正直危うかったが、これなら、こちらの思惑通りだ。

フウルウに再び快心の笑みが浮かぶ。

役割が明白で、意思と準備が充実していれば、格上の相手といえども耐え切るのは難しくない。まして、ラシードたちは決して《再生への導き手》に劣っているわけではないのだ。

次にフウルウはカムヌの杖を水平にすると、己の背の腰紐の部分に指し、手を離れた。

巫女が怪訝な顔をする。これでフウルウの両手は自由になったが、同時に長物を『納刀』した状態である。これから巫術を使うのはわかるが、さして干渉力が大きいわけでもないフウルウを活かすならば、あの傀儡の超人的な身体能力が軸となるはずだ。しかし、何故かフウルウはわざわざ武器を手から離れた。

——抜刀術の覚えでもあるのか……とでも考えているのなら、もう、そちらに勝ち目は無いぞ、巫女よ。

戸惑いが迷いを生み、祝詞が形を成す暇を生む。

『盾と矛が如き二律の背反』

『陰陽相容れず、されど、時に交わりて、象を成す』

『そこに天下るは、死を超越せし力、常世ならざる泡沫の力』

『故に我が身は憑坐——神の器！』

『契約の基、我が夜這いに答えたもう！』

そして、黒衣の少女と白衣の壮士が、言語巫術をそれぞれ完成させる。

『我が后、お力を——《借体形成》！』

『《傀儡戯》！』

鶴が『闇色の大鎌』を天高く掲げる。

次の瞬間、鶴の手から闇が飛び散った。

あるいは《再生への導き手》はそれが誤発現と考えたのかもしれない。少なくとも、正常

な発現だとは考えていなかった節がある。

しかし、それが間違いであることはすぐに思い知ったであろう。

フウルウの全身が仄明るくなっていた。精霊の輝きであるのは間違いないが、神御衣の精霊だけが輝いているのではない。彼の肉体そのものが輝いているのだ。

「そんな、あの男にはまだ上があるの？」

瞑天なる甲冑にて鎧われたその姿は黒い闇に彩られていた。

無垢なる外套にて包まれたその姿は白い輝きを放っていた。

それは後に異形と呼ばれる生体強化外骨格の礎。

それは遥かな未来で精霊甲冑と呼ばれる巨人型義体の祖。

知覚を拡大し、四肢を延長し、閉塞した状況を打破し、次なる可能性を示す——新たな夜明けを志す希望の雛形。

主たる鶴の手を離れた『闇色の大鎌』——《夔》は、その形状を変態させ、傀儡たるフウルウを鎧う甲冑となったのである。女媧泥ユニットの特性を活かし、フウルウの肉体に結合させ、関節を強化し、筋力を統御するための装甲と成したのである。

——機能発現率0・八五。フウルウさん、これは行けますよ。

——当然だよ。そのために無支祈システムとしての機能の大半を凍結したので。

——でも、随分と思いついたことをしましたね。干渉力の増幅という《夔》の最大の機能をあえて切り捨てるなんて。

——こういう急場凌ぎには『足し算』ではなく『引き算』さ。君はまだ若い。あらゆる能力が右肩上がりだ。そんな時はすべてを掴み取ろうという心意気でなければならぬ。しかし、歳を重ね、伸び代が乏しくなった時には、他を切り捨てることで、一を貫く覚悟が必要に……。いや、忘れてくれ。年上であることを偉ぶるとは……。私も老いたものだ。

——いえ、至言ですよ。加えて情報連結も良好なようです。発声器官を経由せずに、ここまで論理的な意思疎通が出来るのですから。

——ああ、しかも声を使ったときのような時間の消費や秘密の漏洩も少なくて済む。その調子で、私の四肢の制御も頼む。

——任せて下さい。誤作動率は0・01以下に抑えて見せます。

フウルウはその鶴の自信に満足した。

これで、この戦闘中は誤作動の心配は不要になったのだ。

将来的には、甲冑化した女媧泥ユニットに主従追隨的動作拡大を行わせることになるだろう。この形相を突き詰めれば、傀儡単独では辿り着けない『超々人』ともいえる領域へと至れる。

しかし、今回は準備があまりにも足らない。だから、そこまでの高望みはしていない。

接続した《夔》を経由し、鶴に《虎体狼腰》^{フーチーランヤオ}の出力を大幅に抑制、補正、統御してもらっているのみだ。要するに誤作動をなくす機能と……。あとはせいぜい純粋な物理装甲としての機能に限定している。運動のためのエネルギーも《傀儡》に全面依存することで、先程問題になっていた《夔》の消耗を解決している。そのため、最大出力などの点では、この《傀儡戯》^{カインギ}はむしろ通常の《虎体狼腰》よりも下かもしれない。

だから、当初は鶴も追加機能を試したがった。若い技術者らしい話である。しかし、フウルウは『余計なもの不要、現状で十分』と追加機能の搭載を拒んだ。

繰り言になるが、フウルウが文字通り『糸の付いた《傀儡》人形』となれば、誤作動の心配はなくなる。不用意に大地を蹴るだけで、どこまで飛んでいくかわからず、それ故に今まで常に抑えていた力（それでも時々間抜けな暴走をってしまった程の力）を、全力全開にできる。

そう、己の——傀儡のすべてを出し切ることができると。

何しろ、鶴の制御という『糸』があるのだ。舞台の外に傀儡人形が飛び出そうとしたら、すかさず『糸』を引いて元に戻してくれる傀儡師と、文字通り魂を繋げているのだ。

これ程心強いものはない。《再生への導き手》など容易く蹴散らせる。

——では、最後に、無支祈システム中枢、傀儡システム中枢に接続します。少し、ピリッとするかもしれませんが、我慢して下さいね。

鶴の説明にフウルウは瞑目する。

女媧泥が頭を包む兜を成し、かすかな苦痛を伴って、その額に無支祈の眼が埋まる。

そして、フウルウが己の二つの眼を開くと共に《夔》の眼も目覚めた。

その第三の眼は、古の帝が具えたという——まさに重華の如き眼。

まさに無支祈システムの核。末端たる女媧泥ユニットが、先の鎌でも、今の鎧でも、いかなる形状でも不変なる器官。後世の言葉で言うところの中央処理装置——Central Processing Unit光量子演算を成す液晶素子と成った精霊による擬似眼球。

甲骨文字には『聿』と描かれ、あるいは『夔』とも描かれた『聖王の魔眼』

——すなわち『旬（舜）』。

しかも、放たれる光は、既に黄昏の日輪たる赤ではない。今や蒼天の大空たる青だ。

未だ光電効果やコンプトン効果は浸透しておらず、光の粒子（量子）説は確立していない。故に、フウルウは詳らかではなかったものの、『青』が秘めるエネルギーは『赤』よりもはるかに上である。

だが、それは穏やかな輝きだった。鶴の時とは異なり、揺らぎのない光であった。

それ故に『紫』の領域を侵すことも、『黒』に見せる錯覚を許すこともない。

止まった水の如く、明らかなる鏡の如く——持ちうる力を最大まで引き出しきっている。

フウルウは異様な高揚を覚えたものの、冷静さを失うことはない。

まさに創造主たる女媧が望んだ究極なる姿である。

——制御巫術に集中している鶴は……問題ない。《サイファールリクシル霊薬の刃》が完璧に守護している。

もう一方の《サラーフ・アルミウムド再生への導き手》には、更なる動揺が走っているようだった。しかし、投降はおろか、遁走すら行う気配はない。

フウルウは手足を構える。ディーナザードが見れば爆笑間違いなしの稚拙な構えであるが、その超人の四肢は脅威以外のなものでもない。

「泥から這い出てきた者どもが……この俺に太刀打ちできると思っているのか？」

戦局は一変した。

味方の矢が降り注いでいる中をフウルウは駆け抜ける。

ラシードたちは敵中に突入するフウルウに構わず、《サラーフ・アルミウムド再生への導き手》へ矢を放ち続けて

いた。

『矢はフウルウの方で避ける。それよりも巫女の手下への攻撃の手を絶対に緩めてはいけない。彼女たちに言語巫術を使わせる暇を与えてはならない』

その指示をラシードたちは忠実に守ってくれている。もつとも、それはフウルウへの信頼というよりも、この《傀儡戯》^{カレイヒ}への畏怖によるものかもしれない。

拡大された知覚を以って、背中から迫り来る矢を認識。強化された脚部を以って、振り向くこともなく回避し続ける。純白の外套や女媧の甲冑を盾にする必要すらない。

冷静に、的確に、成すべきこと成す——そのフウルウの疾走はまさに

——すなわち『俊（舜）』

と呼ぶに相応しいものだった。

実際、フウルウが横に飛び跳ねると（勿論、以前のように障害物に激突などしない）、その後ろから飛んできていた矢に、《再生への導き手》^{サラーフ・アルムムイード}が打ち抜かれて、絶命したくらいだ。どうやら、フウルウの陰になっていて見落としていたらしい。

これで一人。

……しかし、これは私の方に注意が向いていたということ、私の手柄でいいのだろうか？ もしこれをラシードたちの功績とするなら、『私と彼女の二人で、あの十三の敵性戦力を無力化』という言葉を早くも反故にしたことになる——そんなことを考えながらも、フウルウは眼にも止まらぬ動きで、巫女の手下の一人の背後に回りこむ。

彼女は慌てて振り向こうとした。だが、視覚系擬似時間加速能力《神魔の眼》^{カムヤドノタチカラ}を用いているフウルウにとって、その動きは呆れるほどに悠長だ。フウルウは筋力系強化能力《神力の腕》を用いた何の変哲もない掌打——つまりは必殺の一撃を叩き込む。脊髄を打ち抜かれたまだ若い娘は悲鳴を上げる間もなく絶命する。

これで二人。

この時、フウルウの悪癖が出た。この勢いで巫女を倒すべきではないか？ そうすれば、巫女の手下も退くかもしれない。無益な殺生を控えることができる。

しかし、その甘い誘惑にフウルウは打ち勝つ。

正々の旗を邀^{むか}うることなく、堂々の陳を撃つことなし——強い奴からは逃げ回り、弱い所から叩いていくというのが、古今東西に遍く兵法の基本だ。最も脅威となる巫女よりも先に、その手下を取り除く。最後に巫女が残ったとしても、それは多数の力で押し切れる。

数学的証明すら可能な一般法則だ。戦闘前の打ち合わせでもそういう路線に決まっていた。

——ここで作戦を変更してはすべてが台無しになる。……神武不殺には程遠くとも！

その決意と共に、フウルウは両腕で手刀を放つ。左右に挟み込もうとしていた二人の媵婢^{ようひ}の咽喉を切り裂く。

これで、三人、四人。

さらに天高く飛び上がり、飛んで来た射刀を白衣で防ぎ、娘の前に降り立つ。慄く相手に気にも留めず、フウルウは腕を伸ばす。

五人目の頸椎を押し折った辺りで、鶴が嘆息した。

——凄まじいです。素晴らしいです。ククク……これが我が傀儡の真の力！

——……まあ、手元に残る感触はあまり心地よいものではないがね。

——手甲系統の感覚設定に問題ですか？ こちらでは異常は確認……。

——…：…：…今はできなくていいよ。その辺りについては追々ゆつくりと躡ける。

苦いものを覚えていたフウルウだが、これもやむを得ないのかもしれない。あのラシードですら、一連の虐殺を戦捷の萌芽と喜び猛っているだろう。それが普通なのだ。生きるか死ぬかの極限で、フウルウのように『余計な事』にまで考えが及ぶ方が異常なのだ。いずれはフウルウのような異常者のみが、受け入れられる世界を作ってみたいものだが……。

——まあ、誰も彼もが俺のように優秀で有能なわけではないからな。

——え、フウルウさん？

八・人・目・の・頭・蓋・を・握・り・潰・した・辺・り・で、鶴が察知した。

——ああ、すまない、この状態での独白は難しいな。

——いい、いいえ、たしかにフウルウさんが優秀で有能なのは間違いないですよ。この《借体形成》の性能は眼を見張るものがあります。

——だろうね。しかし、何日もの熟慮と試行を重ね、一意専心、乾坤一擲の心意気を以って挑むならば、この程度は容易い。この《傀儡》には元来それだけの性能がある。

——感服いたしました。…：…って、あれ、何日もの熟慮と試行？

——祝詞を聞けばわかるだろう？ これは一夕一朝でできる巫術ではないよ。随分と考え込んだ挙句に捻り出したものさ。

——へー、そうなんですか。でも、それなら、先に話して下さいよ。そうすれば、予め動作確認だってやれたのに。

——ああ、それなら、昨日やっておいた。

——え？

——だから、動作確認なら、昨日やっておいたよ。仮想的にね。ついでに今朝もやってみた。自作の祝詞で体内の精霊端末に介入して、動作確認を済ましておいた。まあ、結果は両方とも失敗だったけど。

——ちよ、ちよっと、待ってください。じゃあ、昨日壁に突っ込んだのも、今朝川に落ちこちたのも？

——ああ、私が勝手に設定を弄ったせいだろうね。感謝しなさい。我々がここまで円滑に傀儡の力を引き出せるのは、君が後ろで動作支援をしていることもさることながら、私たちがそれらの失敗の記録を有機的に反映させていることも大きい。

——設定を弄るって…：…い、いつの間に、そんなことを？

——君が寝た後。気付かなかった？

——いや、おかしいとは思っていましたよ！ 最初の立ち上げは上手くいったのに、それ以降思いつきり空回りするし。精密検査と細部調整を繰り返しているから、漸次安定していくはずなのに！

——そりゃ、私が実験の後、設定をちゃんと元に戻せなかったからだろうね。何しろ、慣れないシステムだ。記録を改竄するのに精一杯だった。

——改竄って、どうしてそんなことを？

——ああ、それは私が君のことを全然信用していなかったからさ。

他人に自分の運命を委ねるなど愚の骨頂。いつ相手を切り捨ててもいいようにと予め用意しておくのは当然。しかし、何故か鶴は戸惑いを隠せない様子だった。

——…：…：…こういう時、どうすればいいのかわたしにはわかりかねますので、帰った

ら、ディーナザードさんに相談してみますね。

——どうした？ 心に揺らぎがあるぞ。怒っているのか？

——…あー、わたし、なんとなく、ディーナザードさんの気持ちが変わってきました。

拗ねたような鶴の態度にフウルウは戸惑った。それこそ、一昔前のディーナザードに近い。いやまったく、女子供というのは難しいものだ。

——（だが、これは…：思っていた以上に《傀儡》側からの《夔》側への操作性が高いな。連動も完璧だ。まるで、私に似た年齢体格の成人男性を《傀儡》の前提としているかのように…：。いや、予めそのように設計されているのか？ しかし、この形態を発現させるには《傀儡》に一定の巫術技能が必須となる。…：では、女媧娘々は当初から《傀儡》候補に巫術に通じた探究士を想定していたのか？）。

身体能力の脆弱を女媧泥ユニットで強化し、干渉能力の貧弱を無支祈システムで増幅させる。その必要に迫られる至弱きモノ。しかし、その着想に辿り着いた後には、すぐさま、その形を発現させ得る。身長約三・五クーデ（約百七十五センチ）の成人男性。

「…：露骨だな」フウルウは思わずくつくつと笑った。「これでは誰をこの娘の守護者に望んでいたのか明白ではないですか、娘々」

ならば、やはり、この藜杖との相性も考慮されているはずだ。万が一、彼がああ光を失っていたとしても、少女の師父足りえ続けるための布石を打っているはずだ。

しかし、フウルウが十人目の娘から腸を引き抜いた辺りで、二人は衝撃が走った。アトラハシスの巫女に精霊が集まっていたのだ。

巫術を使う気だ。それもかなり強力なやつを。精霊には敏感な鶴と、そこに情報連結しているフウルウは、そこに集まっている精霊の質と量に戦慄した。

小技なら、今のフウルウは白衣で防げる。実際、一度防いだ。あの軟弱なアル||イクシルを、長い流浪の間、守り抜き、改良され、特化していった白衣は伊達ではない。今のフウルウの反応速度で用いれば、即時発現する水準の巫術なら防げるのだ。

しかし、これは大技だ。大技だからこそ、二人は発現前に気付けたのだ。だが、気付くことができても、これは白衣で防げる次元の巫術ではない。そして、これ程の巫術を発現寸前まで二人に気付かせなかったのだ。薄々わかっていたことだが、精霊を収束させる速度と、それを隠蔽しきる巧緻こそ、《アトラハシスの巫女》の恐ろしさである。

だが、やはり、これも想定通りだ。

あるいは出し惜しみせずに最初からこの規模の巫術を使われていたら、危なかったかもしれない。しかし、その可能性は低いとフウルウは推測していた。

干渉力が無限でも精霊量は有限なのだ。

だから、神憑っていた時の鶴と同じように、結局、強力な巫術を使おうとすれば、隙ができる。実際、今も二人に対応する時間が（それが著しく短い点は驚異であるが）生じている。巫女の干渉力がどんなに優れていても、実際に働く精霊の方がそれに追いつかなくなるのだ。故に使いどころを考えていたのだろう。

そして、巫女はここに至ってようやく己の力の使いどころを見出したらしい。

集った精霊を光に変えて、神剣の先に灯す。そして、その眼の先には黒衣の少女。

狙いは——鶴。

ラシードも気付いたようで、防御を固めるように指示しているが——おそらく無駄だ。あの規模の巫術だ。表現形も《緩慢なる皆既食》に近い。無論、破壊力という点では、鶴の《緩慢なる皆既食》には及ばないだろう。しかし、ラシードたちの『盾』をすべて打ち砕いて鶴に致命傷を与えるには十分である。

そして、それが最善手だった。もっと早く決断されていれば、危なかったかもしれない。フウルウなら防御が無理でも、回避や離脱が可能だ。だが、そのフウルウの制御に集中している以上、今の鶴は巫術師としてはおるか、十二の少女としても不十分な動きしかできない。巫女の一撃に抗う術はない。そして、鶴が消えれば、フウルウは死んだも同然だ。まさに巫女にとっては起死回生の一手だろう。

——鶴、もう一度だけ、《夔》を完全変態させる。形相は《嗷咽》、いいね？

——了解しました。しかし、この短期間で女媧泥ユニットの性質をここまで把握されるとは……フウルウさんは巫術師としての方が才能あるんじゃないんですか？

——……それ、歴史学者や政治家としてはまるで駄目ってことかい？

——いえー、別にー。

——やっぱり、怒っているな……。まあ、いい。しかし、私はあまり巫術が得意ではない。

——そうなんですか？

——科挙の時も巫術の点が悪くてね、おかげで『榜眼』止まりだったよ。

——……『榜眼』って、たしか『次席合格』って、意味では？

——言語野を経由しているとはいえ、発声を伴わない意思疎通は無駄口が多くなるな。さっさと行くぞ。

——は、はい。

いくら、情報連結故にほとんど時間を食わないといっても、油断の種となっては元も子もない。

『盾を以って矛と成さん！』

そのフウルウの言霊で、女媧泥の甲冑が四肢から分離した。

『象が喰らうは龍の肉、象が借りるは龍の姿』

その鶴の祝詞で、分離した女媧泥の再び一つに収束する。

しかし、アトラハシスの巫女の動きには迷いが無い。神剣を振り下ろし、切っ先を鶴に向ける。既に半ば発現しかかっていた巫術の光が解き放たれる。

だが、間に合った。ここに至ってフウルウは腰に仕込んでおいたカムヌの杖を引き抜く。

『以って、汝は鬼神絶つ刃！』

収束した肉塊がカムヌの杖と結びつく。

『我が志は蒼天への導！《絶招嗷咽》！』

フウルウと鶴の言語巫術と、無言で放たれた巫女の光玉は、ほぼ同時に発現した。

そして——。

「そんな、巫術を……精霊の光を切り裂いた？」巫女の呆然とした言葉が響いた。「じゃあ、あれって、あの霊剣と同質だというの？」

その闇——フウルウから分離した女媧泥の塊もまた『剣』の形を取った。

カムヌの杖を柄と成し、芯と成し、無支祈の闇を刃と成す巨大な『剣』と成ったのだ。フウルウはその『剣』を振るい、巫女の手から解き放たれた精霊の奔流を切り裂き、鶴たちへの巫術の無効化したのである。

その巨大な『剣』は形状を除けば、無支祈の放っている気配は、鶴が持っていた『闇色の大鎌』と大差がなかった。ただし、『聖王の魔眼』は大鎌の時のような硝子球ではなく、やはり、フウルウの額に在った時のような重華の相を保ち、より肥大化し、より肉感的になっている。

——まさに『ラムⅡダオ』だな。

フウルウは初めて『闇色の大鎌』を見た時に連想した祭剣の名を思い出した。『ラムⅡダオ』とは亜熱帯地方の島々で儀式に用いられる幅広の大剣のことだ。長さは二クーデ（約一メートル）程で、刀身が分厚いので、その分重く、両手で持つことが前提となっている。もっとも、今フウルウが握っているその長さ、軽く四クーデ（約二メートル）を超える、その巨大さは北方傭兵たちが用いる文字通りの『両手で持つのがやっとの大剣』の域に達しているだろう。それでも、フウルウが『ラムⅡダオ』を連想したのは、『ラムⅡダオ』には『眼』の食刻がされているからだ。というか、元々、『ラムⅡダオ』には固定の形状はない。斧の形をしている時もある。鈍の形をしている時もある。『眼』の食刻がされることのみが『ラムⅡダオ』の条件であるといえる。あるいは鎌の形をした『ラムⅡダオ』も存在しているかもしれず、鶴の師母がああ『闇色の大鎌』を設計した際、思考の片隅にその存在があったのかもしれない。

だが、フウルウがこれを用いた時、細部はともかく『剣』の形を成したのである。

それ故だろう——巫女に憎悪が宿る。

「……『剣』は貴人の武器。下賤の身でありながら、不遜な！」

「ほう、これでも私の家系は古い貴族で、いわゆる旧世襲制巫術師階級に連なるのだがね」

しかし、巫女が怒る理由はフウルウにも想像できた。『剣』は貴人の武器——今では忘れ去られた古い伝統であるが、そういったところに固執するのが彼女たちなのだろう。

また、フウルウも驚いてはいない。

なにしろ、この《嗷咽》は、結局『剣』の形相を——棄ててきた身分の証ともいえる形相をとったのである。これには苦笑せざるをえない。

「まさに龍の剣（つよこ）、かの蒼き霊剣の模倣器——エミュレーションナーガといったところか？」

「そのようなもの、邪剣に過ぎぬわ」

「……いや、断罪の剣だよ」

最後の一言を巫女には聞こえない声で呟いた辺りで、鶴の声が脳裏に響いた。

——あの……フウルウさん、まずいですよ。傀儡の機能発現率が半分を切りました。出力の低下はないと思いますが、誤作動率が悪化するのは避けられません。やっぱり、直接全身と接続できる甲冑形態とは違って……。

——だろうな。しかし、問題ない。一太刀で仕留める。

複雑な動きをすれば、誤作動率が足を引っ張る。だが、単純な動きなら、その確率は低い。今のフウルウの脚なら、一足で巫女に詰め寄れる。そして、媵婢の数が減ったので、彼女たちの守りも手薄になっている。そこを突いて、巫女の命を断てば、残り二名はなんとかなる。先程述べた兵法の常道には背くが、やむをえまい。時間をかけると（＝動作数が増えると）誤作動が致命的なことになりかねない。

意識をアトラハシスの巫女へ集中するフウルウ。

真っ直ぐな瞳。似ている。誰に？——とは考えるまでもない。どういう育て方をされたのかも、想像が付く。彼女の白化個体じみた容姿も、痲疾を含めた稀人を以って、巫祝足りえるという上古の思想故。

おそらく、彼女は鶴のもう一つの可能性だったのだろう。

——同情を挟む余地はないぞ、フウルウ。彼女を赦したら、今日私が殺めた者たちはどうなる？

いや、それ以前にこの巫女は人間を殺めている。おそらくは今回の二人だけでなく——もっと多くの人命を、あまりにも軽く。殺された者の中には、当然、ディーナザードに突っつての亜父や、鶴にとつての師母のような人間もいただろう。あるいはフウルウのように志を頼りに孤独と孤高の狭間であがいていた人間もいただろう。

だから、許容できない。フウルウが治世の人間である以上、許容できないのだ。

——仕留めるしかない。

祭礼において、『ラムⅡダオ』は生贄の生首を骨ごと両断する。そのために、刀身が分厚く、重く、両手で持たねばならない。あるいは、断頭台の刃と同じで、犠牲となるもの苦しみを短く終わらせるためともいわれる。そして、今でこそ生贄は羊や牛が主だが、かつてはヒトが用いられていたという。

——あるいは今も同じか。もともと、当人は、己を人ではなく、神なのだと考えているのかもしれないが……。

いずれにせよ、フウルウにとって、彼女は許容できない。それでなくとも、フウルウは不寛容な人間である。だから、断罪する。彼女は——そのための犠牲だ。

「我が名は撫齒フウルウ！ 瑞獸獬豸かいちの裔すえ、票家第二十一代太郎也！」タイランなり

白い衣を高くたなびかせ、黒い剣を低く掲げ、フウルウは力強く大地を蹴る。

目標はアトラハシスの巫女。小細工なしの一直線。

傀儡の神速縮地と白衣の気流操作を併せたその動きは、既にこの世のものではなかった。しかし、それでも、『再生への導き手』は諦めない。残る媵婢の一人は、勇ましくも、巫女とフウルウの間に割って入った。そして、媵婢は震えながらも、傀儡の王へと短刀を向ける。さらに巫女は衣を刃に変じ、何本もの触手と成して、フウルウに向かって解き放つ。軌道からすると、その触手はフウルウに当たる前に、媵婢を貫く。だが、むしろ、それが狙いなのだろう。媵婢の身体を犠牲にして、フウルウを貫くつもりなのだ。しかも、巫女も媵婢もそのことへの躊躇が微塵も感じられない。

「うおおおおおおお！」

初めて猛り昂り、雄叫びを上げるフウルウ。

その時、無支祈の眼球『聖王の魔眼』は、赤を越え、青を超えた。そして、ヒトが視認し得る最も振動数の大きな光——それは奇しくも人の世における最も高貴なる色——すな

わち、『紫』へと至った。

かつて、聖女ファティマが狂王マルドゥックの玉体を神去らせた剣。

かつて、勇者チーシューイが賢者アルイクシルの覚醒を守り抜いた剣。

あの《^{ナーガ}竜王》の名を冠する霊剣の如く——フウルウの巨剣はすべてを切り裂く。

迫りくる触手も媵婢も掬い上げるような一撃でまとめて薙ぎ払う。

娘の臓腑と鮮血と、少女の裸身を覆っていた残り少ない薄衣が飛び散る。

巫女は呟いた。

「また巫術が無効化された。間違いないわ、それはあの蒼き霊剣と同質の存在……！」

己の股肱が死んだことよりも、己の巫術が破られたことが衝撃らしい。

そして、そんなことだから、フウルウは手を汚さねばならないのだ。

遮るものは最早何もない。

「砕け散れい——我が四凶放逐の一撃を以って！」

完全にフウルウの間合いに入ったところで、剣を上段に振り上げる。そこで巫女の小さ

な声が聞こえた。

「凄まじい。素晴らしい」

やはり、彼女は鶴と同じだ。違うのは彼女が既に完成された人格であり、もう手遅れだということだ。

刹那の躊躇い——そして、フウルウは剣を振り下ろす。

ぎりぎりで彼女は何かの巫術を発現させかけたが、収束し始めた精霊ごとフウルウは断ち割った。

巨剣による一撃である。美しかった少女は醜い肉塊へと変わり果てる。

「ここは神去りし、我らが世。汝の有り様認めること……あたはず不能」
 勝敗は決した。

残り一人になった巫女の手下はうろたえ、その隙に複数の矢が次々と射抜いた。

その時、フウルウが何か言おうとして、言い止まり——露骨に嫌な顔をしたのを鶴は後になって思い出すことになる。

緊張の糸が切れたのは、フウルウが《^{アト}夔》を『闇色の大鎌』に戻し、鶴に返した時ではなく、ラシードが部下に武装の点検を始めさせた時でもなく、鶴が安心の吐息を漏らした時だろう。

「これで終わりですね。損失は死者二人。あの《^{アト}トラハシスの巫女》を相手に上出来……」

という鶴の言葉言い終わる前に、

「死者を出した時点でこちらの負けだぞ、娘子」

「死者は十四人と一柱だよ、鶴」

と、男二人が口を挟んだ。一斉に非難された鶴はわずかな不満とともに小さくなったが、男二人にも齟齬がなかったわけでもない。少なくとも部下を問答無用で殺されたラシード

は、その尊い犠牲と、殺戮集団であった《再生への導き手》の死を同列に扱ったフウルウに眉を顰めた。わからないでもない。死んだ二名の遺族からすれば、この場に転がっている屍をさらに陵辱しても気は済むまい。

しかし、鶴の立場も理解できてしまう。戦禍と戦果を冷徹に秤に掛ければ、さほど悪い結末ではない。魔女が生きた乱世とはそういうものであり、その弟子である鶴もそういう時代から来たのだ。

ただ、フウルウとラシードたちはそういう時代そのものの放逐者なのだ。

そして、その片割れらしく、ラシードは厳正に行動を再開する。

「まあ、とりあえず、こっちの用件は済んだ。……おい、娘子」

「何です」

「縄に付け」

鶴は壮絶にため息をつく。

「……しつこいですね。これだから男は嫌いなのです。そもそも、わたしが何をしようのですか？」

「不法入国！ 及び公務執行妨害及び名誉毀損及び器物破損だっ！」

ラシードは大地を揺るがす勢いで、怒鳴りつける。鶴はビクリと四肢を振るわせた。

「……ああ、やっぱり……」

と、嘆きの声で呟いたのはフウルウで、その後に

「もう少し、詳しくご説明願います、ラシード殿」

と、穏やかな声を繋いだのはアルIIイクシルだった。

「おお、賢者様ご無事でしたか！」

今度は感激の声を上げるラシード。一人嘆いているフウルウ。状況を訝っている鶴。

アルIIイクシルは突如表れたようにも見えるが、そうではあるまい。おそらく、精霊の動きを追いかけたのだろう。あるいは元々この場にいたが、身を隠していたのかもしれない。彼はカムヌなしでは大した戦力にはならないし、乏しい干渉力故に見つかる恐れも少ない。

そして、三者を見回してからアルIIイクシルは提案した。

「まずは、負傷者の手当てを。その次に、僕の家でお茶でも飲みながら話しましょう。これ以上、話がこじれると色々な意味で收拾がつかなくなる。不謹慎ながら、犠牲者への追悼はその後ですね」

つまりはこういうことらしい。

アルIIイクシルの小屋で、フウルウ、鶴、アルIIイクシル、ラシードの四名は状況を整理した。なお、小屋の中に入りきれないので、悪いがラシードの部下には外で待機してもらうことになった。

鶴を追いかけていた警官隊——鶴の語る《アルIIイクシルの手先》——の中心人物であ

るラシード・イブニムハンマドは≪乙女の泉≫に家を持ってはいるが、最近では国境警備のために単身赴任することも多いのだという。

ただ、猩紅熱の一件は例外的な事態である（フウルウは一人「え？」と首を傾げたが、他の三人は周知のことなので省略された）。それ故にラシードも一時帰郷が許され、彼は≪乙女の泉≫に戻っている。被害を抑える手段を模索している最中に、アル||イクシルと出会い、後に医療現場で彼の手足となつて、動いていたという（フウルウのような異分子をラシードがあつさり信用したのも、この時の善い結果が彼の中に根付いているからかもしれない）。

さて、こうして、アル||イクシルは≪乙女の泉≫に住み着き、また≪乙女の泉≫自体も落ち着きを取り戻したわけだが、それで日々の営みが絶えるわけではない。家族の病気を理由に任務を離れていたラシードも国境警備のため再び単身赴任した。

数ヶ月前まではそれなりにラシードは平和に仕事をこなしていたが、ある日……、
「いつものようにアツザフルへの入国審査をしていたら、許可証を持っていない少女に出くわした。まだ十代前半の彼女は黒ずくめの格好をしていた」

勿論、それが鶴である。呆れたことに師母と狭い世界で暮らしていた鶴は入国許可証の存在を知らなかったのだ。

「……確かに下調べが足りなかったのはわたしの失態です」

「まあ、相手は子供だし、言葉も通じるし、ちよつと世間知らずなことを除けば態度にも問題はなかった。世間知らずにしたところで歳相応だしな。とりあえず、事情を聞いてみようと考えた」

それは互いに比較的、理性的平和的に始まった会話だったが、たちどころに……、

「……聞かなくても、大体わかった」

「僕も、なんとなく」

フウルウとアル||イクシルはすぐに納得した。要するに……。

『お嬢ちゃん。お嬢ちゃんはどうして、アツザフルに来たのかね？』

『決まっています！ 息するだけで迷惑千番、生きる破局の素、物食う悪夢の種、軒を立てて寝る禍因（中略）悪の大魔王、諸悪の根源アル||イクシルをぶち殺すためです！』

『……さて、君の言うアル||イクシルとは≪乙女の泉≫^{アイン・アル||アトラ}にいらっしゃるアル||イクシル殿かね？』

『ご存知なのですか？』

『ああ。しかし、あの方は君の語るようなお人ではないぞ』

『何を仰るのです！ あいつはお師匠様を殺したのですよ！』

『馬鹿な……あの方が人殺しを？ いや、一步譲つて、君の師匠が賢者様に殺されたのなら、それは君の師匠に非があったのではないのかね？』

『なんと、お師匠様が悪いと！ おのれ！ あなたさてはアル||イクシルの馬鹿の手下ですわね！』

『何い、賢者様を馬鹿だと！ 黙って聞いていれば、入国許可証不携帯に加え、賢者様を愚弄するとは！ いい加減にしないと牢屋にぶち込んでやるぞ！』

『あははは！ 語るに落ちましたね！ これではつきりしました！ アル||イクシルめ、このような姑息な手段で命を長らえようとはなんと見苦しい！ しかし、そうはいきませ

ん！ 必ずぶち殺してやります！』

『貴様、私の前で殺人予告だどっ！ しかも、賢者様の！ ええい、不法入国未遂及び殺人未遂、その他諸々で逮捕だ！』

『ククク……禍時の命、望まれざるものよ。我が黒き衣となり、我が暗し刃となれ……くらいなさい、お師匠様謹製！ ≪招妖幡マギトキイノチ≫！』

どカーン。

『う、うわあ……せ、戦闘用言語巫術だと、く、くそう、ひつとらえろ！』

『ふふふ、お師匠様を侮辱した罪、万死に値します。が、兄弟の仇は兵に反らず！ あなたに構っている暇はありません。あの男を殺すのが最優先です！』

『お、おのれ、魔女め！ 賢者様に手は出させんぞーっ！』

『ふはははは、さらばです！』

……てな感じのことがあったに違いない。その後もラシードは单身、鶴を追い続けたが、その圧倒的な巫術ゆえに鶴を追い詰めることはできなかった。そんな中、鶴はフウルウと出会い、狼に出くわし、二人が契って、事ここに至り、一方のラシードは鶴を探していたというわけだった。

「今にして思えば、手紙を書くか、人を遣わせばよかったです……賢者様は無用な煩いを避けたがっておられましたし、私としても恩返しを……いえ、違いますね。いいところを見せたかったです……あなたに……この歳になって」

ラシードは顔を下げる。アルⅡイクシルはその姿にびっくりしていた。

そこで、鶴は「男同士で気色悪い」と呟いた。さらに「教養は乏しくとも、精神は誠実、肉体は頑強、何より一途に無力な己を慕ってくれる——そういえば、勇者チーシュイも似たようなところがあったわね。はっ！ なるほど、いかにも、あんた好みの男だわ！」とか喚いていた。

だが二人の「ラシード殿、頭を上げてください。あなたは立派な方です。僕のような駄目人間に頭を下げてはいけません」「いえ、私がつとうまくやっていたら、イーサーとリディアを失うことも無く、賢者様にも不快な思いをさせなかったはずなのです」という間には入り込めない。

そして、それが不愉快なのか、鶴は頬を膨らます。

「この娘のせいで死んでしまった人や後遺症を負った人はいないんですね」

「ええ、幸いにも」

厳密に言えばこの場に一人いるのだが、そのことは誰も言わなかった。

「では、こうしていただけますか？ ラシード殿」アルⅡイクシルは提案した。「この娘の違法行為によって発生した損害はすべて僕が弁償します。不法入国については事後処理になります、今から僕が申請します。勿論、それでこの娘の行いが許されるとは思いません。ですが、年齢、境遇を考慮し、責任能力が欠如しているということで、実刑だけは避けてもらえませんか。執行猶予でも構いません。保証人が必要ななら、僕がなりますし、保釈金が必要ななら、僕が払います」

「し、しかし……」

食い下がるラシードに対し、アルⅡイクシルは椅子を退かして……頭を下げた。

「僕のがままだということはおわかっています。しかし、ラシード殿。あの娘は悪い女に

騙されているだけの健気ない娘なのです。どうか、お願いします」

悪い女のくだりで、鵜がぎゃあぎゃあ騒ぎ出したので、フウルウは彼女の口を抑えた。一方のラシードは頭を下げるアルⅡイクシルにあからさまに狼狽し、「そちらこそ、頭を上げてください」と手を差し出す。

「……私は裁判官ではないので、判断はできません」

「では、せめて、今は保留ということだ」

うまくまとまりかけたこの処置に烈火の如く怒ったのは、勿論、鵜だった。フウルウの手がこの少女の口を離すとすぐに……、

「ふざけないでよっ！ 何で、あんたにそんなこと、決められなきゃいけないのよ」

「しようがないだろう。不法入国というのはれっきとした犯罪なんだから、何故、犯罪かという……」

「黙れっ！ 貴様に助けられるくらいなら、無期懲役だって受け入れるわよっ！」

「やれやれ、まるで駄々をこねている子供だな」アルⅡイクシルはそういつて立ち上がった。

「いいもん！ どうせ、わたしは子供だもん！」鵜はアルⅡイクシル農園産の西瓜をシャリシャリと齧りながら、「大体、何よ。他のみんなにはちゃんとお茶が出ているのに、どうして、わたしだけ、別なの！」

「そりゃ、君が希望を尋ねた時にそっぽ向いてたからさ。あと、僕が飲んでいるのは茶チャイではなく、乳酸飲料乳酸飲料だ」

「じゃあ、何で、わたしの前にでっかい西瓜が出ているのよ。人を子ども扱いをして！」

鵜は実に支離滅裂だったが、アルⅡイクシルは真摯に答えた。

「それはその西瓜が今の僕の最高傑作だからさ。どうだい？ 甘いだろう。肥料の配合にコツがあつて……」

「うるさいっ！ つまらん蒔蓄なんて、聞きたくない。せつかくの西瓜が不味くなる！」

ここまででたためな事をされると、逆に子供なのだど割り切れるのか。ラシードは憚然としながらも、鵜に怒りを示すことはなくなった。

しかし、フウルウとしては、いささか不機嫌な声を捻り出さざるをえない。

「鵜、謝罪の言葉を」

「……保護者気取りですか？」ぷつと、鵜は西瓜の種を皿に吐き出した。

「違う。今の私は保護者なんだよ」行儀が悪いなとフウルウは顔を顰め、「忘れたのかい？」そう迫ると鵜も己の未熟さを認めざるを得なかったらしい。「……ちよつと国境の柵を乗り越えただけじゃないですか」と、拗ねる様な物言いになっていた。

フウルウは長息し、珍しく優しい口調で諭す。

「あのね、鵜ちゃん、一定成熟した社会においては、国境が必要不可欠なんだよ。特に人間の移動はそこで慎重に管理せねばならない。国とは船のようなもので、その船に無尽蔵に人間を乗せたらどうなるか——考えればわかるだろう？ アツザフル帝国は極めて大きな船だが、そこにある資源は無限ではない」

ラシードはうんうんと頷いていた。

「資源は有限なんだ。水、食料、土地、衣類、金属資源から、帝国が提供しうる公共事業から労働力需要に至るまですべて有限なんだ」

滔滔と語るフウルウに、アル・イクシルが疑問を挟んだ。

「……労働力需要も有限と見るのかい？」

「はい。商品の供給そのものが需要を生み出すという発想は一般的には誤りですから。それは極度に生産力が貧弱な条件下でのみ成立する経験則に過ぎません」

「本気か？ 確かに、短期的にはそれもありうるかもしれないが、自由市場である限り、長期的には商品価格が変動するんだぞ」

「ええ、しかし、それは無意味な前提ですよ。我々は長期的には皆死んでいるのですから」故郷で嫌というほど語ってきた理論をフウルウはもう一度簡単に説明した。

アル・イクシルも認めた通り、短期的に商品は売れ残る。したがって、現実に交換される需要量——これを仮に有効需要と呼ぶ——は、供給と一致しないことがしばしばである。そして、その時、供給量は有効需要に一致するように調整される。すなわち、供給に等しい需要が存在しない場合、全体の所得が減少することで、総需要と総供給が等しくなる。つまり、労働賃金の暴落——ひいては非自発的な失業が発生しうるのだ。

「……貨幣は商品交換の仲立ちを一時的に見えにくくするだけの幕ヴェールのようなものだと思っていたが……」

「それは金利及び貨幣選好などの諸要素を無視した机上の空論です。しかし、逆もまた然り——それらを財政政策と金融政策によって、適切に制御できれば、法令の一文を書き換えるだけで、今飢えている者を救えるのです」興奮したフウルウの声は大きくなった。

「人間の英知は経済という巨大な怪物ですら、飼い馴らすことができるのですよ」
「う、うーん……」

探究士らしくアル・イクシルは安易に否定することはなかったが、「にわかには……信じがたいな。それが事実なら、現行の経済学は根っこからひっくり返る」と、やはり安易に肯定することもなかった。

フウルウは渋い顔になる。

結局の所、この『一般理論』を浸透させられなかったことこそが、フウルウの改革が躓いた最大の原因なのだ。それにアル・イクシルのように『一般理論』そのものに疑いの眼差しを向けるもの——すなわち『政争』における敵——は、まだ、まともな連中だった。救いようがないのは『党争』における敵だった。すなわち——あいつは本ばかり読んでいて実社会での経験がないとか、あいつの何代前の先祖は異民族と交わっていたとか、あいつは昔苛められっ子で、友達がいなかったから、人間力やコミュニケーション力がないんだ、言葉を知らないんだ、丞相の椅子が目的ではないとか言っているけど嘘だ、あいつは丞相を演じることでしか、人と話ができないから、そーだそーだ、そうに違いない……なんたらかんたらの『その脳内妄想がすべて事実だと仮定して、私の政策とどういう関係があるんだ？』と是非とも御教授いただきたい連中……！

今にして思えば、後者の有象無象に付き合う暇があったら、前者の人間たちともっと話し合うべきだった。

とはいえ、この点については、フウルウが先進的過ぎたのかもしれない。当人は知る由もないが、この時フウルウが述べた発想は、異世界デッサにおいては《革命》レボリューションと呼ばれる程のものであった。そもそも、この時代に完全な貨幣経済を既に念頭に置いているフウルウが異常である。この産業段階ならば、むしろ、アル・イクシルのようにあくまでも物々交換こそ

が経済の基本と考える方が正常だろう。あるいはフウルウもまたアル||イクシルの語る『精霊による歪んだ歴史の流れ』が産んだ異能の一つなのかもしれない。

それ故か、フウルウの言葉を曲がりなりににも理解できたのはアル||イクシルのみだった。知識人とは言い難いラシードは完全に置いてけぼりをくらっていたし、幼き故に社会経験に乏しく、人文科学に疎い鶴もちんぷんかんぷんだったようだ。

第一、話がとんでもない脱線をしている。

そのせいか鶴は意地の悪い笑みを浮かべ、

「ま、白衣如きに理解できないのは無理ありません」

と、お茶をすすりながら、したり顔で語った。

「何しろ、フウルウさんは進士ですからね」

次の瞬間、アル||イクシルの顔が凍りついた。

「しかも、**榜眼（次席）**だったんですってー」

次の瞬間、アル||イクシルの手から杯が落ちた。

「あ、あの鶴……」

「でもでも、それ故に周囲の嫉妬を買い、故国を追われた悲劇の俊英——ああ、素敵。どこかの誰かとは大違い」

そう言つて、鶴は何故かその小さな身体をフウルウの腕に絡ませてくる。

フウルウは思わず「お、おい、ひつつくなよ」と嫌がったが、すぐにアル||イクシルから放たれる猛烈な憎悪に気圧された。

「い、いや、でも、ほら、結局『状元（主席）』にはなれませんでしたし」

何故弁解するのか——自分でもわからなかったが、フウルウは必死に言い訳していた。

「第一、政界から追い出されるといふ事は、結局人望がなかったといふ事ですから。私自身的人身掌握術が不足していたといふことです」

「ふーん、へー」と、アル||イクシルはブルブルと体を震わせる。「で、お偉い選良者エリートさんは次席じゃ不満ですかあ？ 上から二番じゃ不満ですかあ？ じゃあ、ウルルの小学府に入学決まった時、僕は何番だったかご存知ですかー？」

「二番だったわよね、ただし、下から」

何故か即答する鶴。そして、アル||イクシルは暗い声で続けた。

「そーですよー。僕は下から二番だったんですよー」

「いやあのその……」

こうなるとフウルウには返す言葉がない。

待て、どうして鶴はそんなことまで知っているのか——と問う前に、鶴はますますフウルウにひつついてくる。そのうち、フウルウの腕に頬ずりを始めた。

「へー、へー、人望がない割に女の子にはもてるんだねー。そうだよねー。同じ人望なかっていっても、無能で軽蔑されて左遷された僕と、有能で嫉妬されて追放されたらしい君

とじゃあ、全然違うもんねー」

——だから、厭だったんだ。科挙に合格と言っただけで、いつもこうなるから！

大体、何で鶴はこんなに愉しそうなんだ。アルIIイクシルのフウルウへの異様な憎悪が膨れるごとに、何故かこの小さな魔女はますます嬉しそうに微笑む。

そして、ハツと思いついたようにラシードの方に向き直った。

「あ、わたし、フウルウさんのおかげで、国境線の持つ重要性が認識できました。ええ、あくまでも、フウルウさんのおかげで」

これっぽちも理解の容子など見せていなかったのに、鶴は不自然なほどに『フウルウさんのおかげ』を強調し出した。挙句、今での頑固さが嘘のような素直さで、ラシードに頭を下げる。

「ごめんなさい。隊長さん、わたし、フウルウさんのおかげで、自分の罪深さがようやくわかりました。どうか、赦してください」

ラシードは、この鶴の態度にやられてしまったようだ（後から聞いた話によると、愛娘がちょうど鶴と同年らしい）。

「ま、まあ、そう素直に謝れたら、こちらも無下にできんな。部下や私の傷の手当もしてもらったし……。わかった。確約はできませんが、こちらでもできる限りのことはやってみる」

「ああ、ありがとうございます！ ラシードおじさま！」

「これからは、ピヤオ・フウルウ殿の言うことをしつかりと守り、人様に迷惑をかけないようにするんだぞ」

鶴はラシードの言葉に「はいっ」と元氣よく頷き、そして、フウルウの胸にぎゅつと抱きついてきた。

「これからもお願いしますね。フウルウさん」

「あ、ああ」

うまくいっている。うまくいっているはずだ。実際、問題は次々と解決し、鶴は上機嫌だ。なのに——何故かアルIIイクシルはフウルウへの敵意をどんどん強めている。そもそも、鶴はこんなにベタバタと身体的な接触をしてくる娘だっただろうか？

——これは絆が確立された証なのか？ それにしては……。

実に不思議なことに、鶴は一挙一動ごとに、ちらちらとアルIIイクシルに視線を向けていた。しかも、少女はその度に、ディーナザードを髣髴とさせる艶笑を浮かべるのだった。

そんなこんなで別れの日が来た。

最後の問題であったラシードの利き腕は女媧泥ユニットの一部を移植することで、完治が見込めそうだった。その場にいた全員がその技術に感心していたが、鶴だけは釘を刺すのを忘れなかった。

『今回たまたま適合しただけで、次回は失敗するかもしれません！ 決して、過信せず、普段の予防と術後の安静を心がけるように！』

そして、さらに少女は付け加える。

『特にフウルウさんに言っておきます。フウルウさんに移植した傀儡システム中枢は既に

固着し、機能分化を終えています。今後、他の人に移植しても役には立ちません。もう一つ付け加えれば、同じものを作れと言われてもわたしには無理ですからね。無支折システムも傀儡システムもお師匠様から譲ってもらっただけで、今のわたしに同じものを作る力はありません。この先、あの時のフウルウさんのような大怪我をした人間に出くわしても、わたしには打つ手はありませんよ』

だから、そうならないようにしろということらしい——と納得したフウルウは同時に、たまらない嬉しさを覚えていた。それはとてもいい傾向なのだ。何しろ、この時、鶴は師母でもなく、フウルウでもなく、赤の他人の命を気遣っていたのだ。

この様に、興味と関心、思いやりの対象を広げていけば、あの《アトラハシスの巫女》とはまったく異なる存在に彼女は育つ。喜び勇んで、アルⅡイクシルとラシードに報告すると、二人そろって、『親バカ』と罵られた。貴様らに何がわかる。初めて出会った頃の鶴は己の師母以外のことはどうでもいいという思想に凝り固まっていたのだ。それからしばらくして、フウルウのことを心配してくれるようになったが、しかし、一度はラシードたち《乙女の泉》の住人を殺しかけたのだ。それが今ではラシードの怪我を癒そうと本気で挑んでくれているではないか。この調子でいけば、成人する頃には、生きとし生けるものすべてを慈しむ聖母になっているに違いない。フウルウが熱く語ると、再び『親バカめ』と罵られた。もっとも、鶴がいい方向に向かっているという見解そのものには同意を示してくれたし、その過程で、ラシードがわずかに残っていたフウルウと鶴への不信感も消え去ったようだった。

仲間を弔い、怪我を癒した後、フウルウと鶴をアルⅡイクシルの小屋に残したまま、ラシードたちを先に街へ戻っていったのは、その証拠だろう。

その後姿を笑顔で見送っている自分に気付いたフウルウは、

——やれやれ、俺も日和ひよったものだ。

内心自嘲していた。今、思えば、かつてのフウルウは、鶴の他人を寄せ付けない部分だけを集めた人間だった。

——ああ、だからこそ、あの連中は俺を……。

その事を悟った時、フウルウは鶴と共にミナレットに帰ることを告げていた。

アルⅡイクシルは別れを惜しんだ。フウルウにも似た思いがある。

実際、この《乙女の泉》での交流は得難いものであり、彼の蔵書は大変後ろ髪を引かれるものだった。だが、フウルウにも思惑があるのだ。

やや不満を残しながらも、アルⅡイクシルは理解を示し、小屋の近くでフウルウと鶴を見送ることになった。……になったのだが、事ここに至って鶴の悪い癖が再び出た。

やむを得ず、フウルウが鶴を窘める。

「さて、鶴、最後に言うことは？ ラシード・イブンⅡムハンマド殿へとは別に、アルⅡイクシル殿にも言わねばならぬことがあるのでは？」

「……」頬を膨らませ、子供じみた不満を見せる鶴。

「鶴、私はもう二度と君に手を挙げたくはないんだがね？」

そのフウルウの言葉に鶴はあからさまに怯んだ。

「ピヤオ殿……それは……」

「あなたは黙っていて下さい。これはこの娘にとって必要なことなのです」

ぴしゃりと言いつつ、アルルクシルは不満げなまま、押し黙る。

「大体、君も昨夜はアルルクシル殿と仲良くやっていたじゃないか。『女媧娘々の見下しの眼差しとクククツという嘲いの組み合わせが齎す、背筋にゾクゾクツとくる感覚の素晴らしさ』云々およそ常人には理解しがたい偏執的で変態的な話で歓談し共感し盛り上がっていたじゃないか」

「あ、あれは勢いです！ ちょっとした一夜の過ちです！」

そのまま、フウルウと鶴が押し問答になりかける。見かねたらしいアルルクシルは口を挟んできた（フウルウはいい顔をしなかったが、結局は押し切られた）。

「鶴ちゃん、鶴ちゃん。今が好機だよ。杖をピヤオ殿に渡しているから、今の僕は並みの巫術師以下だ。君なら、一瞬で仕留められるよ」

「ふん。そんなあんたなんかに興味はないわ」

「……それは残念だね」

「心配しなくてもいいわよ。今度やりあう時までには、杖付きのあんたを打ち破れるようになっていくから。フウルウさんに、杖を返してもらった上で、コテンパンに叩きのめして——わたしの靴に口付けさせてあげるわ」

そして、鶴は「クククツ」と師母を精一杯真似ているであろう眼差しと嘲いを見せる。ちなみにそれは昨夜鶴が『どうせ、わたしの眼差しと嘲いなんて、お師匠様には程遠いのよ』と嘆き、アルルクシルが『いや、ゾクツとはきた、あと一歩だよ』と慰めていたものである。

当然アルルクシルへの効果は薄く、

「それは愉しみだ。僕は死ぬまでここに居座るつもりだから、いつでも歓迎するよ」

と毎度の鷹揚な態度で返される。しかも、その後彼は「……いや、むしろ、それよりも」と鶴を凝視し始めた。それもディーナザード顔負けの舐め回すようないやらしい目つきだった。

「な、何をじろじろ見ているのよ」

「君を」

「わ、わたしはまだ初潮前よ！」

「つれないな。僕は君を心の底から愛しているんだよ」

「へ、へ、へ、下手な誘惑ね」よほどおぞましいのだろうか、鶴の口はあからさまに空回りしている。「で、でも、わたしはかどわかされないわよ」

「それは違うな、少女よ。僕の彼女いない暦は実年齢に等しい。——すなわち、このアルルクシル・ディアウス、生まれてこの方三十余年、一度たりとも女性に好かれたことなどないのだ！」

「と、当然よ」と、鶴は形容し難き表情で言い返した。「だ、だからどうしたっていうの？」

「しかし、僕は女性が大好きだ。特に君のような魅力的な女の子なら、なおのこと。だが、僕は女性にもてない。この齟齬が緊張を生み、わざとらしい態度に繋がっている。だから、先の言葉は僕の精一杯の告白なのだよ」

「嘘付けっ！」

「いやいや、本当だよ。それとも、君は僕が女性に好かれる男だと思うのかい？」

「それは……いえ、そもそも、だ、大体、わたしが魅力的って、具体的にはどの辺りのこ

とを指しているのよ？」

「顔とその黒髪かな」

「……そ、外面だけ？」 鶴は薄っすらと頬を染めた。「他にも何か……」

「いや、勿論、中身も気になっているよ。胸の膨らみとか腰のくびれとか、機会があれば、ぜひ覗いてみたい——でも、その黒尽くめではそれも難しい」

鶴はハツとなつて、顔を真っ赤にし、両手で自分の身体を抱え込んだ。

「探査巫術を使おうにも、君なら瞬く間に無効化するだろうし」

「さ、最っ低ね！ あんたって！」

向きになる幼子に賢者は溜息を吐いた。

「では、逆に問おう。『黒』を受け継ぐ者』よ。君はあの黒衣の魔女に比肩しうる要素が他にあるというのかね？」

思わず押し黙る鶴。アル||イクシルは表情を引き締め、視線を黒衣の内側へと向けた。

「……^{クイ}夔型無支祈システム——その精霊型精霊結晶細胞は大したものだ。それなら、遠い未来、大気や大地から精霊が完全に根絶され、ネットワークからの支援がなくなつても、己一つで『神憑り』を維持できるかもしれない。いやむしろ、それが目的だな。まさに『祈られることも支えられることも無きもの』——真の『無支祈』。故に『夔』ではなく『夔』。

『夔一足』||『夔は、一つにして、足るもの』というわけだ」

「……当然よ。これはお師匠様がお創りになられたものなんだから」

すると、アル||イクシルは「彼女とて、常に思い通りに事を進めていたわけではないよ」と首を横に振った。

「同じ無支祈でも、阿翦が使っていた試作品の^{トウ}夔型無支祈システムは所詮ヒト型精霊結晶細胞に過ぎない。それ故に周囲の精霊の状態によって、『神憑り』の条件が大きく左右された。技術的に未成熟だったんだ。とても、現在の精霊密度で『神憑り』を引き起こせたとはいえない。光栄に思いなさい。彼女はその無支祈システムの研究開発に大変な尽力をしていたが、ついに完成品を己の手で振るうには至らず、^{トウ}澁々未完成の試作品『夔』で代用するしかなかった。しかし、君の手の中にあるその^{クイ}夔型無支祈は、紛れもない完成品だ。君は、彼女が望みながらも、彼女が手にすることが叶わなかったものを、彼女の力によって手にしている」

「……」

「ところが、それでなお、あの有様だった。ちなみに言っておくがね、阿翦は未完成品の無支祈であっても、この俺一人如きは易々と圧倒していたよ。しかし、君は完成品の無支祈を用いても、やはり、あの有様だった。巫術戦一つとっても、彼女と君の差は厳然としている。……何か言いたいことは？」

歯軋りをしながらも、鶴は粛々と頭を下げた。

「……師母の名を汚さぬよう。精進いたします」

「よろしい。君は『黒衣の後継者』だ」アル||イクシルは何故か憧れの眼差しを少女に向けた。「誇り高く生きろ」

「それはあなたに言われることはありません」

鶴は堂々と明言する。アル||イクシルは苦笑いを見せた。それは、これまでのような何

かを誤魔化そうとする芝居じみた苦笑いではない——本気で辛そうな——それこそ泣きそうな顔だった。

「……そうだな、その通りだ」

そして、彼は照れた顔を隠すように俯いて……言葉を繋いだ。

「僕を殺すなら、少し時間を措いてから来てくれ。そうだな。僕が、農地を耕し実験を繰り返す体力がなくなり、君を苛立たせる返答を送るだけの気力もなくなり、肌はただれ、肉は削げ落ち、骨が常に折れかけになって、日々の大半を寝台の上で過ごし、腐臭と糞尿をただれ流すようになったら——その時は君を歓迎するかもしれないよ。死神の乙女」

「ふざけるなっ」何故か鶴は悲しそうな顔で憤っていた。「あんたのそんな姿なんて、わたしはっ、わたしはっ……」

「鶴、僕は断じてふざけてなどいない。阿翦と違い、僕に老いから逃れる術はない。時期と程度の差こそあれ、いずれそうなる。君についても同じことが言えるけれど、君がそうなるのは僕より、三十年ほど後だ。どうしても僕を殺したいなら、その時まで待つて欲しい」

「……また、詭弁を」

「では、尋ねよう。僕と違い、阿翦は少なくとも肉体的老化は避けられた。しかし、彼女はその人生の末期に、死神から積極的に逃れようとしたかい？それよりも他に為すべきことがあると考えてはいなかったかい？ 例えば、少しでも君を……」

「黙れ！」

烈火の如く憤った鶴は、しかし、誰にも窘められる前に、己の過ちを正した。

「ごめんなさい。アル||イクシル・ディアウスさん」

終節

「……というわけだった。色々問題は残っているし、何度かこちらからアル||イクシル殿を訪ねる事にはなるだろうが、とりあえずは解決した。すまないな。色々心配をかけて……」

長旅で疲れた鶴を寝かしつけた後、フウルウは長い話を終え、ディーナザードはがっかりした。

「なんだ、結局、アル||イクシルは殺されなかったのね」

「……今の発言は聞かなかったことにおいておいてやる」

「うふふ、だつてさあ……」

「いい、聞きたくない」

「つれないわねえ……。じゃ、お土産は？ あの白衣は男物みたいだし、あの藜杖は精霊結晶らしいのに、全然反応しないけれど……」

「あれは両方ともアル||イクシル殿から頂いた。……養育費にしてくれということだな」
 勿論、それが真意ではないだろう。確かにあの純白の外套は神御衣——その本質は精霊結晶である。売れば金になる。神御衣としても便利である。しかし、あれがウルルの在学証明であり、あれ一つで帝国からの庇護を引き出せしえることを鑑みれば、金銭に換えるのは得策でない。そして、フウルウやディーナザードには何故か反応しない精霊結晶の藜杖《カムヌ》。こちらはアル||イクシル以外の者には、でたらめに強度が高い棍棒としての価値しかない。これも売れるであろうが、やはり養育費とするのに向いているとは言い難い。

おそらく——『鶴を頼む』ということなのだろう。

鶴を取り巻く情勢は把握こそできたものの、改善されたとは言い難い。あの一件で《再生への導き手》の力は削いだ。しかし、アツザフル王朝誕生後二百年も帝国と戦い続け、そして、生き残ってきた《再生への導き手》がそう易々と滅ぶはずもない。何より、彼女たちが鶴を狙う理由はなくなっていないのだ。また、アル||イクシルの仲介でラシードたち警察機構の協力を取り付けたものの、相手が《再生への導き手》となると、分が言いとはいえない。無論、帝国が本腰になれば、話は別だが、そうすると今度はフウルウたちの身辺に帝国が疑念を抱くだろう。いや、ラシードたちにはアル||イクシルへの恩義でうまく誤魔化しておいたものの、彼らも鶴の正体を勘繰っている。そして、帝国もこのまま精霊に消えてもらっては困る以上、鶴にとって、帝国が《再生への導き手》たちと同質の存在になる見込みは十分にある。いや、この現状そのものもはや帝国にあえて泳がされているだけでも考えられる。

たしかに帝国は《再生への導き手》ほど、精霊へ拘泥していない。既にフウルウが《再生への導き手》を叩きのめしていることもある。交渉の余地があるとすれば、帝国だろう。加えて、本当に鶴の存在で精霊の再生が可能なのならば、フウルウもそれにあえて反対はしない。フウルウは鶴が愛おしい。だが、学術的な欲望や政治的な野望もまた厳然としてあるのだ。そして、その上で、それらは両立しないものでないと考えている（ディーナザードには異見があるだろうが）。

——落とし所を探るために、機を見て、もう一度、帝都へ向かうか……。それで駄目なら、《夏の国》への亡命も視野に入れるべきだろうな……。

おそらく、その際に、この《白衣》と《藜杖》は役立つに違いない。

そして、何より——フウルウへ託したことの証なのだ。

「……あの方も粋な計らいをするよあ」

「お土産はー？」

感傷をぶち壊すディーナザードの一言。フウルウは少し眉を顰めたものの、結局は黙って、ガサガサと荷物から取り出す。

「……こっちだよ」

フウルウは全三巻の本を手渡した。

『自然哲学における数学的諸原理』？ これ、まさか、あのミンガラムのっ？」

「予定通り、帰りには帝都ムンダペレに寄ってきたのでね。買ってきた。高かったぞ」

「高いっ？ 馬鹿なこと言わないで！」 さっそく、頁を捲りながらディーナザードは怒鳴った。「これは人類の宝よ！」

思わず、フウルウは微笑した。だが、ディーナザードの言葉はけっして過激なものではないだろう。

かつての帝国初代丞相祝融も、ミンガラムが書き散らしていた覚書の山から、この本の基となった部分を流し読みしたらしい。その時、彼女は今のディーナザードと同じように大声で喚き叫んだという。祝融氏は冷静沈着で厳格な法治主義者である。そんな彼女が知的興奮に身を任せて『あんたこれ、出版しなかったら、死刑！』とまで怒鳴ったのである。祝融氏らしからぬ感情に任せた越権行為だ。しかし、このことについて、彼女を非難するものはいない。むしろ、世俗の名声を厭い、研究の発表を怠けたミンガラムの身勝手さこそ、非難されることが多い。

運動の三法則や万有引力の法則を記した『自然哲学における数学的諸原理』は、それだけの代物なのだ。この書物により人類は惑星運動の三法則などの——いや、究極的には森羅万象、この宇宙におけるすべての——物理現象を数学的に証明し、理解することが可能になったのである。

まさに古典物理学における聖書。後に時間と空間の絶対性が破られるまで、『物理学はの一冊で事足りる』とすら言われ続ける人類史上に燦然と輝く名著だ。

それはフウルウも承知している。だがそれでも、皮肉屋のディーナザードがここまで無邪気に喜ぶ姿は見物だった。

「それと一応言っておこう」この機会を逃さずに——と心中でフウルウは付け加え、「ついでに帝都で戸籍庁に行つて来てね。鶴を正式に私の……」

「妻にしたのっ？」ディーナザードは本から目を離した。

「……養女だよ」フウルウ・アル||ピヤオ・アブ||ヌエは訂正する。「日を遡つて処理を行った。これで不法入国云々の問題は半ば解決したわけだ」

「どっちにしたって……、ああ、もう、あたしは許さないわよ！ 鶴ちゃんの操はあたしのものなんだから！」

「……相変わらずだな」

窘めつつも、フウルウはいい気分だった。こんな日々がいつまでも続けばいいのに——

そんな甘えが彼の心を支配しかける。だが、その直前で、フウルウはかろうじて踏みとどまった。

そして、フウルウは己の勇氣すべてをつぎ込む。

「なら……鶴ウツクハニエの母になる気はないか？　なんとというか、その、君が鶴の扶養者になれば、あの娘は正式に帝国市民権を獲得できるし……」

デイナーザードは、しばらく、きよとんとした顔をし——後に、ニヤニヤしだした。

「……へえ、じゃあ、この本は《求婚マツメの証ハル》というわけかしら？」

フウルウの喉はカラカラだった。予定ではもつと気取った受け答えを用意していた。しかし、現実のフウルウには全身全霊を費やしても、これが精一杯だった。

「わざわざ、こんな高級品を買って来て、自分の娘までダシにして、おまけに親子程も歳の差がある元教え子に求婚するわけね、先生は？」

「………」

デイナーザードの顔はいつものいやらしい笑みを浮かべている。言葉も霸王樹のように刺々しい。そして、その棘はフウルウの後ろめたさの表れでもある。彼女の言葉は正しい。何一つ間違っていない。

「……その通りだ。なりふり構っていられないくらいに、俺は君にぞっこんなのだ」

力強く言い放った瞬間、思わず、フウルウは拳を握った。

——よし、やったぞ。言ってやったぞ。

何せ、フウルウにしてみれば数年越しの告白である。とりあえず、言えたというだけで、肩の荷が下りた気がする。これならば、別に振られても……。

「ふーん、でも、あたしは先生みたいな男、好みではありませんよ」

「……そ、そうか」

やっぱり、痛恨だった。

「し、しかし、お得だぞ。私と結婚すると……色々、特典がついてくるぞ。えーと、例えば、例えば……なんだ……その……なんだ……」

見苦しいことにフウルウは食い下がろうとした。が、情けないことにその後の言葉が続かない。口は空回りするばかりで、息ばかりが苦しくなってくる。

デイナーザードはそんなフウルウに心底呆れたように溜め息をついた。そして、一言。

「ま、いいですよ。結婚して差上げます」

パクパクとしながらも何とかフウルウも息を整えた。「……いいのかわ？」

「勿論、先生みたいな男は嫌いですよ。でも、あたしは寛容な女ですから」

「本当にいいのかわ？」

「しつこいですねえ。これで『自然哲学における数学的諸原理』が手に入って、鶴ちゃんと毎夜毎夜、色々と遊べるなら、安いものでしょう？」

「ま、まて、後者を認めるわけには……」

「じゃ、結婚してあげません」

「くっ……！」

「けけけ、よっぽど、あたしを鶴ちゃんにとられちゃうのが嫌なんですねえ」

フウルウは黙ったまま、顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。

「そういうところ、嫌いではないですよ。先生……。あ、変な意味じゃないんで誤解しないように」

ディーナザード・ビントⅡヌーフ・アルⅡシャービス・ウンムⅡヌエは己の夫つまに釘を刺した。